

新編

心

理

學

全

川大石

井戶

國榮

次吉

郎
共著

明治

27 3 28

内交

東京

松邑三松堂

新編心理學序言

本書は、始て心理學を學ぶ師範學生の爲に著述せるものなれば、専ら大體の知識を確實に收得せしめん事に意を致し、精微なる専門的理論を避け、力て「某曰く」を減じて、引例を多くし、字句を平易にして、無用の負擔無からしめん事を期せり。但、その所期を空しくせざりしや否やは、我等の自らよく知る能はざる所なり。

學生考究の資に供せんが爲に、章節の終に二三の問題を掲げたり。問題は十分よくその章節を領得し、かつ已知の知識を應用するに非ずば、解答し得ざるもの、若しくはその章節に關係ある通俗事等より擇べり。

本書第一篇及第二篇は、學生をして先づ斯學の概見を得しめ、之に由りて興味を感じ、かねて術語の一斑に通ぜしめんがため、各方面より斯學に關する通俗事を集録せり。さればその中には、所謂階段的眞理として姑く許容せるもの無きに非ず。

本書を使用して心理學を教授せんとする諸君は、先づ一回通讀したる後に於てせられんことを要す。而して每一時間間の教授分量は、凡そ二頁半とせらるべし。

明治三十七年三月

東京に於て

著者誌

新編心理學



第一篇 緒論

第一章 心理學とは何ぞや

一、心意 人は身體と共に心意を有す。心意は無形の現象にして、眼之を見、手之を撫づる事能はずと雖も、拱手瞑目して、却てよく之を認むる事を得るものなり。

心意現象の一二の例を言はゞ、人は事物を見聞して之を知る事あり、嘗て知りたる事を思出だす事あり、何事かに就て

川島庄一郎
大戸榮吉共著
石井國次

愉快を感じ、又は不愉快を感ずる事あり、地理書などを讀みて、未だ見ざる他國の風景を實地に見るが如き心地する事あり、又、かくの如きものには常にかくの如き事あり」と悟る事あり、深く考へ合せて「かくあるべし」など推知する事あるが如き是なり。心意といふは畢竟此等諸現象の總稱に外ならず。

心意諸現象は、之を、心意と稱する一無形物の活動と見做して、心意作用ともいふ。

二、心理學 心意諸作用は無形にして且つ複雑なれども、よく之を検すれば、その間に幾多の種類ありて、その各種類はそれぞれ一定の性質を有し、一定の理法を以て、順次に生滅するを見る。例へば、愉快げに人の運動するを見て、己も之

を試みんとする願望を生じ、その願望を達せんがためには、早く日課の復習を終ふべきを考へ、よりて、その決心をなし、勉強し、勉強終りて後運動をなすが如し。この勉強運動の間に、又種々に心を活らかす事は勿論なり。斯の如く、心意諸作用の互に生滅起伏する状態を心生活といひ、その中に存する一定の理法を心理といひ、之が考究を心理學といふ。

一、博物學物理學と心理學との異同如何。

二、上に挙げたる外に於て心意作用の二三の例を示せ。

第二章 心理考究の方法

心理考究法の第一 は、自ら自己の心意作用を見る事なり、之を省察法といふ。古に「隠れたるより顯はれたるはなし」といへる如く、心意作用は直接他人に見えずと雖も、我れ自

身には見えざる事無きなり。蓋し、心意は、知り又は感ずる作用をなすと同時に、自ら、又、その知りたるを識り、感じたるを識るものなり。之を意識といふ。例へば、讀書してその解し難き所に至り、苦心沉思してやうやく之を解し得たる時は、人は、そのむづかしき學理の知識を得ると同時に、又その如何なる事情に於てその知識を得たるかを識る類是なり。心意作用は、すべて、意識あるによりて、直接に自身に知らるゝものにして、若し意識無き時は、たとひ心意作用あらんとも自身に知られず、隨て心理考究の材料とはならざるなり。

心理考究法の第二 は、他人の心意作用を観察する事なり。之を**觀察法**といふ。他人の心意作用は直接に之を見る事

能はざれども、その容貌言語舉動等によりて、間接に之を知る事を得。例へば、澁面又は長大息によりてその人の苦感を察するが如き是なり。この法は符號を見てその眞物を知らんとするものなれば、その眞物たる心意作用に就ては、省察法によりて、前に、之を知り居らざるべからず。例へば、影を見てその雀たるを知るには、その以前に、雀を見たる事有るを要するが如し。故にこの法は省察法の補助法たるに止まり、獨立の價值なきものとす。

心理考究法の第三 は觀察の爲特に試験を行ふ事なり。例へば、眼によりて或一物の外形を認め得んためには、或一定の大きさ距離光度に於て幾何の時間を要するか、又は、人間の耳にて聞き得べき最も高き音の振動數は幾何なるか、探

を試験し、若しくは兩脚器の尖端を以て觸覺の疎密又は神經の勞逸を實驗する類これなり。之を實驗法といふ。省察法・觀察法は、共に、自然に現はれ來る所のものに就て考究するものなれば、實驗法にむかへて之を経験法と稱す。實驗法は經驗法を基礎として、その上に一步を進むるものなり。

一、承諾・拒否・疑惑の符號たる舉動如何。

二、新聞紙歴史は心理考究の材料となるか如何。

第三章 心理學の種類

一、考究法による區別 經驗法によりて考究せられたる心理學を経験的心理學といひ、實驗法によりて組立てられたるを實驗心理學といふ。實驗心理學は主として、神經系統

に於ける生理的變化と、心意作用との關係に就て記載するがゆゑに、一に又生理的心理學と稱せられ、又その心理の説明に、物理學・數學の原則を應用する所よりして、精神物理學とも稱せらる。

以上は皆省察法・觀察法・實驗法により、個々の心意作用を検して、其種類性質・理法を考究せる者なるが、之と全く異なる方法によりて組立てられたる心理學あり、これを哲學的心理學といふ。こは、心意の本體・本性を論じて、其去來・生滅を説き、先づ根本理法を立て、之を根據とし、以て個々の事實及理法を論定せんとする者なり。今多く用ひられず。

二、材料の種類による區別 小兒の未熟なる身體が漸く發達するが如く、その未熟なる心意作用も漸く成熟するなり。

この未熟にして發達中なる心意に就て、その状態理法を考究したるものを**兒童心理學**といふ。人の身體に疾病あるが如く、人の心意も亦時に常軌を脱する事あり、之を病的**心理學**といふ。之を材料として考究したるものを**病的心理學**といふ。人集合して、その間に心意の交通あるときは、各人の心意互に相制し相剋して、こゝに共同の所有物たる集合心意を生じ、その心生活を繼續す。この集合心意を對象とせるものを**集合心理學**といひ、もし或國民に就てのものなる時は之を**國民心理學**と稱す。又動物の心的現象を考究して、之を人間の心意作用に比較したる**比較心理學**といふものあり。

通常の大人の心意を對象とし、**兒童心理學**、**病的心理學**等を

參按して考究したる**心理學**を**普通心理學**といふ。前に述べたる**實驗的**といひ**經驗的**といふものは、専ら、この**普通心理學**に於ての區別にして、本書の如きは**生理的心理學**を參按したる**經驗的普通心理學**なり。

三、**心理學**に**近き諸學術**　心意作用の一種に**美感**と稱する感じあり。花を見、月を眺めて生ずる感じ、若しくは卓越なる人の容貌、風采等によりて引起さるゝが如き感じ、是なり。美感の因て起る状態及其の理法を専門的に考究せるものを**審美學**といふ。又多數の事實を總合してその一般に關する**眞理**を發見し、若しくは已知の**眞理**を考合せて未知の**眞理**を推知するを**思考作用**といひ、その方式に就て考究せるものを**論理學**といふ。これらは皆**心理學**の或一部を特

に深く考究せるものなり。
人間の行爲の善悪を規正する倫理學、主として人間の心意の助長を論ずる教育學、宇宙萬象の第一原理を求め、人天の關係を明らめんとする認識論哲學等に對しては、心理學はその基礎學若しくは直にその一部分たる關係あり。骨相學といふものは、生理的心理學を根據とせんとし、催眠術といふものは、生理的心理學と病的心理學とを應用せんとするものゝ如し。されども、未だ安全に信用すべき程度まで發達し居らざるに似たり。

一、心意の本體及其の去來に就て何等かの思想ありや。

二、生理學の對象は如何。

三、大に何等かの心意作用ありと思ふか。

第四章 心理學の効用

一、人事諸學科に 教育學は専ら人の心意を助長する方法を考究するものにして、その方法はすべて心理學の指示する理法に基くべきものなれば、心理學は實に教育學の基礎學科なり。倫理學、哲學に於ても略ぼ之に似たる關係ある事は既に前章の終に述べたる所なり。其他政治學、法律學、醫學等も、個人又は群集の心意に關係あるものなれば、その完全なる學習には、必ず、多少心理學を考究せざるべからず。歴史、經濟學、文學、美術等の考究に於ても亦然り。

二、修養に 心理學を考究するときは、我内心の状態明に我に識られ、恰も心意に眼ありて之を見るが如くに、その誠偽、美醜灼然たり。之に由りて、人は自ら誠意の境に到り易し。

又感情の激發せんとする場合などに於て、靜に我内心を省察し、過失に至らずして止む類往々あり。されば自ら修めて然る後人を修めんとする宗教家、教育家などには、此點に於ても亦特にその必要を見るなり。

又よく心理學を學びたるものは、人は如何なる場合に於て忿怒し、怨望し、憎惡し、若しくは忘却し、虚言するかを知るが故に、人と交りて、人をして過失に至らざらしめ、若しくは人の非行に對してよく宥恕する事を得べし。

一、父母たるものに於ての心理學の効用如何。

二、何人も多少の心理學的知識ありといふその例を示せ。

第二篇 心意と身體との關係

第一章 性年齢體質と心意と。遺傳。

一、性年齢と心意と 男女性を異にするに従ひ、一般にその心生活に多少の差異あり。通常、女子は感情強く、それが爲に意志甚だ強き事あり、又至て弱き事あり。深く理を推究すること少く、概して心理、數理等の無形物の思考に拙なり。但、有形事物の觀察は緻密なり。

兒童少年は、その未だ深く事物の理を推究せざる點、心理、數理等の思考に拙なる點は、婦人に似たれども、感情鈍く、長く同一種の心意作用に耐へず、但、新奇なる事物を見聞して之を記ゆる事は旺なり。青年に至るに隨うて、その感情漸く強く、思考、推究の作用も亦漸く盛ならんとするが故に、大體は婦人に似て、不完全なる理窟多く、猜疑、嫉妬、牽強、抗辯、極端

に走る等の弊に陥り易し。壯年の心生活は感情と思考と平均を保ち、事を遂行せんとの意志強くして、久しきに耐ふ。但、單に物を記ゆる事は少年の如くならず。老人は概して心意作用遅く、漸く盡するに及びては、耳目衰へて、知ること記ゆる事漸く薄く、感情鈍く、意志弱くなりて根氣つゝかず、思考推究漸々困難となりて、一般に睡眠前の状態に陥るを常とす。

二、體質と心意と　　體質は、通常、神經質・多血質・膽汁質・粘液質の四つに分たる。神經質の人は顔面蒼白、眼光り、若しくは眉しかむ様の外貌を有し、一般に瘠せたり。多血質の人は紅顔豊頬、膽汁質の人は赭顔にして筋骨逞しく、粘液質の人は筋肉たるみ、皮膚黄色を帯びたり。これらの人の心生活

は、神經質は青年の如く、多血質は少年の如く、膽汁質は壯年に似、粘液質は老人に似たりとせらる。之を人の氣質ともいふ。但、多くの人は右四種の體質の種々なる配合より成るものにして、純粹なる一體質の人は極て稀なりとす。本項及前項にいへる所は、皆大凡の談にして、必ずしも的中せず。其は身體と心意との關係未だ全く明瞭なるに至らざるが故なり。特に注意すべきは、體質は生理的狀態の如何によりて、常に變化するものなる事是なり。

三、遺傳と心意と　　人の身體は、頗る大同にして、極て小異なり。その小異の點に於て、子孫はその父母祖父母に似る所あり。之を身體上の遺傳といふ。遺傳は祖父母以上更に隔たりたる祖先よりする事あり。この場合は直接にその

遺傳たるを知り易からず。唯他の生物に於ける遺傳の理法よりして、間接に推知するのみ。心意の側にも遺傳なるが如く見ゆる實例往々あり。之に就て、或者は之を兒童出生後、家庭に於ける周圍の事情より、自然に感得するものなりといひ、生理的心理學者は、之を體質及神經系統の組織の遺傳に基くものならんといへり。

第二章 不健康身體と心意と。睡眠死。

一、不健康身體と心意と 身體虛弱なる人必ずしも虛弱なる心意を有するものにあらず。心意に最も關係ある神經系統完全なるに於ては、或程度以下の身體の虛弱は毫も心意に影響せざるが如く、却て「才子多病」といふ事さへあり。これによりて、身體強壯なる人、必ずしも強壯なる心意を有

せざることを推知すべし。但、こゝに身體といふは、神經系統を除きたる他の部分の事なり。

或程度以上の虛弱若しくは疾病、傷痕は、多少必ず心生活に變態を引き起し、其甚だしきものは、虛弱の爲に老衰者同様となり、病熱の爲に狂人となり、傷痕の爲に人事不省となる。之に反して、心意の疾病例へば非常なる失望、恐怖、憂慮等が翻て身體の不健康を引起す事は、何人も常に見聞する所ならん。祈禱、禁厭の類が時に疾病に有効なるも、多くは此に類する關係により、心意よりして身體に影響するものなり。又寤睡は藥劑を以て腦髓を刺戟し、よりて以て一時心意作用を休止せしむるものにして、興奮劑も亦先づ腦髓に作用し、腦髓の興奮によりて肺、心等に及ぶなり。以て腦髓と心

意との密なる關係を知るべし。
盲啞等の癡疾者は、それぞれその種類の知識を缺けるは勿論、外物の刺戟少くして心意の作用緩漫なる故、その發育一般に不良なるを常とす。靖保己、一の如きは全く特例なり。
二、睡眠 熟睡は一時全く常時の心生活を休止せしむ。されども、身體の側に於て、呼吸、消化、血液の循行等をやむる事なきが如く、心意の側に於ても、意識ある心意作用はなしと雖も、それ以下の作用は存在するが如し。例へば、熟睡中、刺戟に應じて種々なる運動をなし、而して自ら之を識らざる類是なり。

夢は熟睡せざる時に現ずる意識朦朧なる心意作用なり。故にすべて漠然として、合理的ならざる事多く、従て、人はそ

の品格を下して動物に近づく事あり。又或は獨立羽化して登仙するが如きことありと雖も、共に不稽を免れず。而して夢に於て見る所のものは、すべてその人の過去の心生活に於ける、かれこれの事物の取りまぜなり。夢想に於て或奇術を得たりと稱する如きは、偶然にあらずば假托にして、夢占の如きは、之によりて以て或はその人の心生活の一端を推察する事を得べしと雖も、その他は恐らく何等の的中することなかるべきものなり。
睡眠より覺むる時は、身心の活動力充滿せるを常とす。活動力とは活動をなし得べき状態の事なり。生理的心理學者の告ぐる所によれば、睡眠前に費消せられし腦神經の組織は、睡眠中絶えず循行し來る血液によりて漸々補償せら

れ、こゝに復び心的活動をなし得べき状態となるなり。活動し得べき状態全く備はるときは、些細なる刺戟もよくその活動を喚起し、以て自ら目さむるに至るなり。

三、死 睡眠は活動の休止にして、死は生活の滅失なり。睡眠に於てすら意識ある心意作用既に無き事を思はば、死に於ては何等の心意作用も絶無なる事知るべし。但し心意作用なしといふといへども、之を以て直に靈魂なしと論ずるものとすべからず。作用をはなれたる心意の本體即ち靈魂の有無を論ずるは、普通の心理學の領分にあらず。

一、疾病によりて至て感情鋭くなり、爲に兒童の辨へ得る事理をも正當に思考し得ざる人を見たる事ありや、其の状態を醒れ。

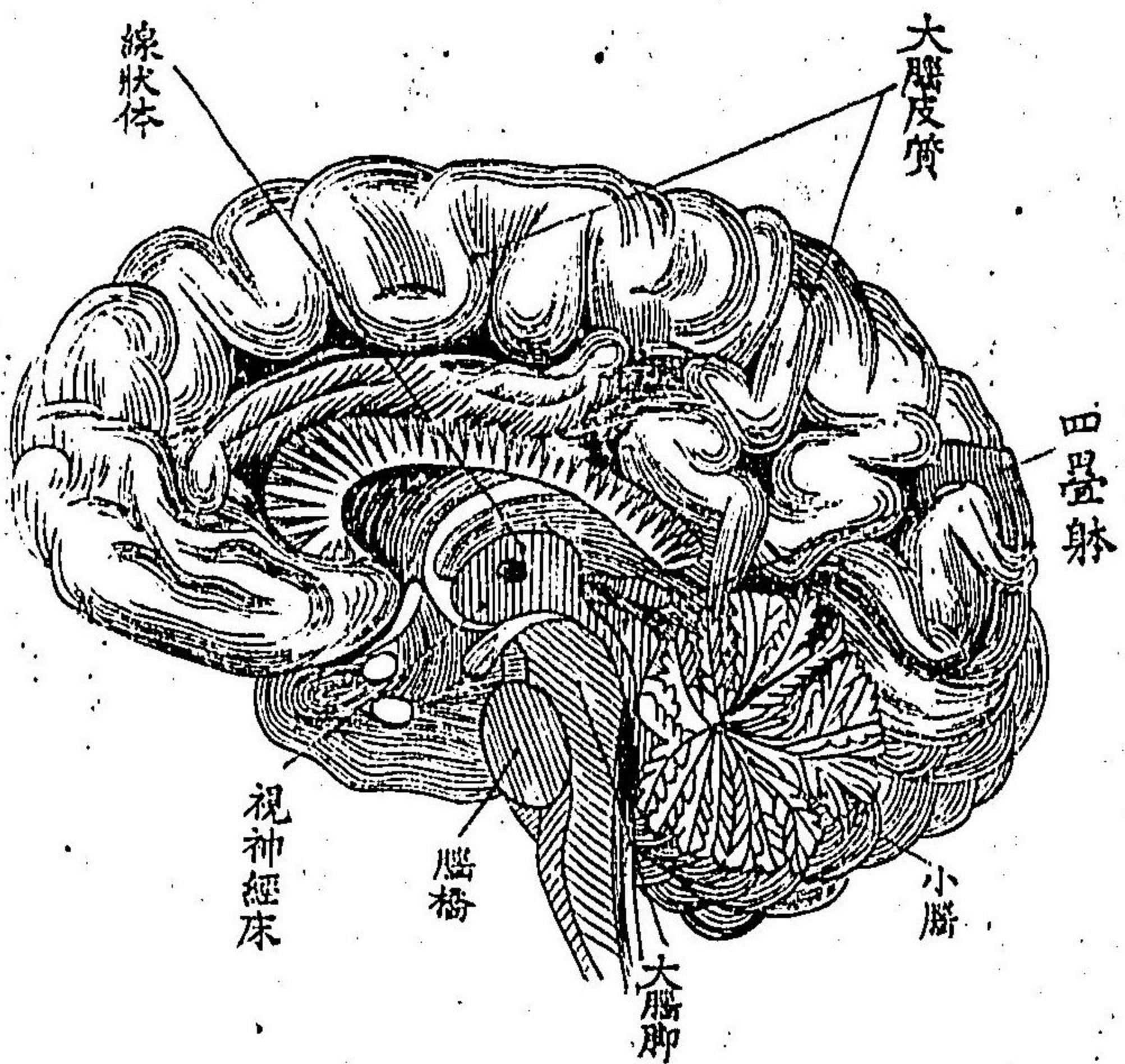
二、恐ろしき夢若しくは憂慮措く能はざるが如き夢は、通例いかなる場

合の睡眠に多きか。

三、如何なる體質の人は、通例、快潤なれども氣變り易きか。又如何なる體質の人は、通例、我慢剛愎の氣質を有するか。

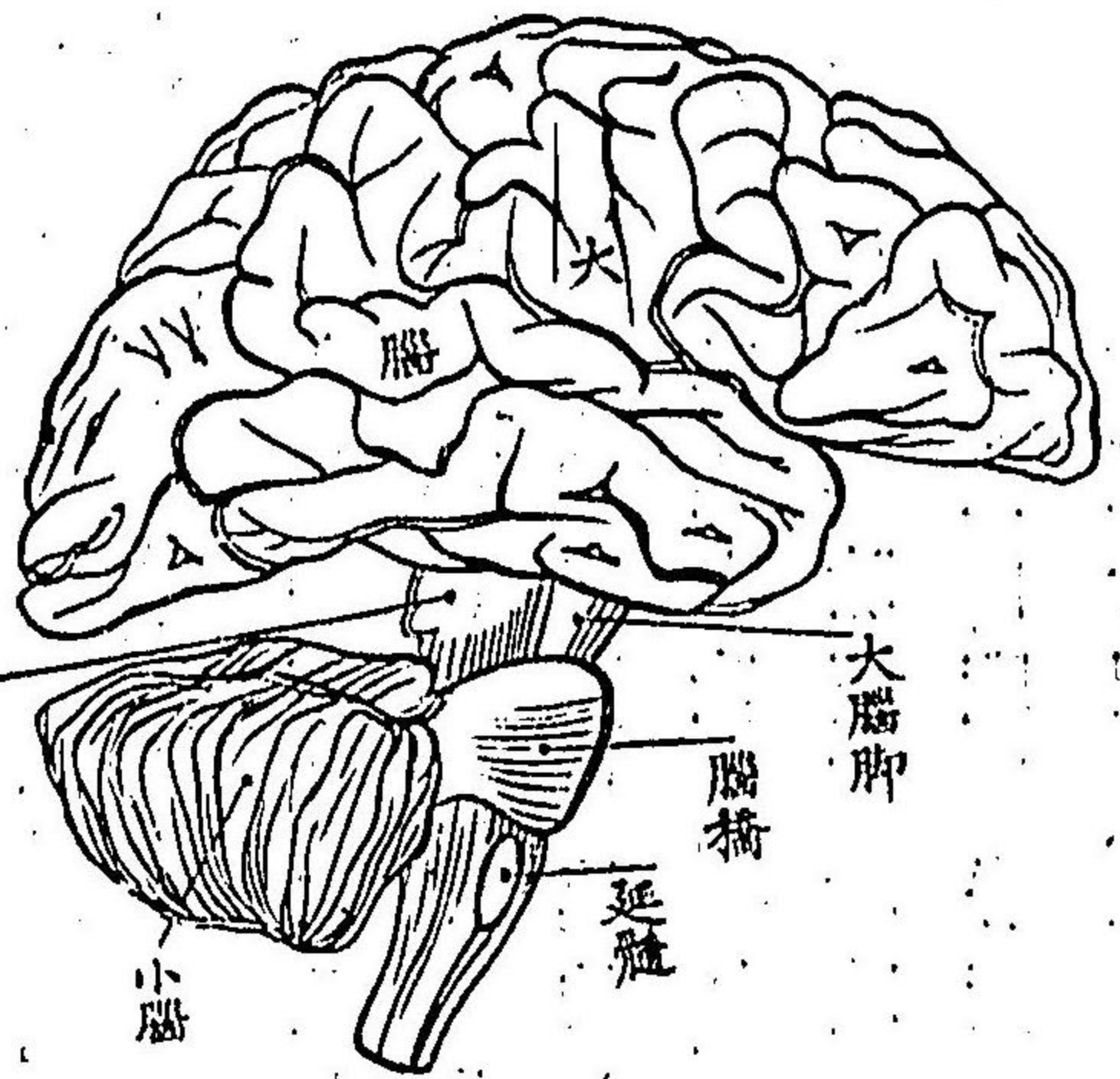
第三章 神経系統

一、脳髓 身體各部中、心意作用と最も密接の關係あるものは脳髓なり。脳髓はすべての神経の綜合せる所にて、頭蓋骨の腔内にあり、**大脳・小脳・腦橋・延髓**の四部に分たる。大脳は白質と灰白質とよりなる。灰白質は碎きたる蒟蒻様の神経細胞にして、頭蓋骨の裏面に接著し、表面に腸管状の溝を有す。又大脳皮質と稱せらる。生理的心理學の實驗によるに、意識ある心意作用は、すべてこの大脳皮質の變化に伴ふものにして、之を除去するときは、一切自ら識る所の心



意作用を失ふ。その或部分が或種の心意作用に關聯すといふ事は、實驗上既に略ぼ信すべきが如しと雖も、唯その部分の外形大小のみによりて、その人の心生活を推斷せんとする骨相學の如きは、恐らくは正鵠を失ふ事多かるべし。白質は神経纖維にしてその内部に位し、線状體

視神経床・四疊體・大脳脚に分たる。腦橋・延髓及他の神経と、



白質と灰白質との混合より成る。運動を調整し、位置の感

大脳皮質部との連絡の局に當り、線状體を傷くれば反對側の兩肢その運動の分量を感ずる能はず。視神経床を損へば視覺を害し、又反對側の運動感覺に障礙を起し、四疊體に故障あるときは盲目となり、大脳脚を害すれば甚しき疼痛を感じ、又反對側の感覺を失ひ、運動も不十分となる。小脳は大脳皮質の後下部に位し、

覺を司るが如し。

腦橋は延髓・小腦の纖維を受け、錯綜して大腦脚に致す所に
して、亦灰白質を含めり。腦橋の疾患又は切斷は、感覺及運
動の痲痺を生ず。

延髓は腦橋の下部に位し、腦髓と脊髓とを連結する所なり。
灰白質中心にありて、白質外圍にある事大腦と相反せり。
この機關は、脊髓に連結して感覺運動を司るのみならず、嗅
神経・視神経を除くの外、すべて頭部に在る所の各種の神経
を出す。眼瞼閉鎖・噴嚏・咽下・嘔吐等は皆その司る所なり。
又肺・心其他内臓は、脊髓神経の分布せる所なれども、延髓よ
りも亦神経を出し、腦と内臓との關係をして一層親密なら
しむ。之を**交感神経**と云ふ。驚怖又は羞耻の心意作用に

よりて心臓の鼓動直にはげしくなり、呼吸切迫の感あるが
如き、若しくは内臓に故障ある時、直に腦に傳へて所謂氣分
を悪しからしむるが如き、皆この神経の然らしむるところ
なり。

二、脊髓 脊髓は脊椎骨の中にあり。灰白質内部にありて、
白質外圍にあること延髓に同じく、各椎骨の間より左右各
前方と後方とに神経をいだし、前方のは運動神経にして、
後方のは**感覺神経**なり。いづれも軀幹・四肢・内臓に分布す。
脊髓神経**左右相交**して腦に入るが故に、腦の左半に於け
る障礙は軀幹・四肢の右半に影響す。脊髓延髓は、その有す
る所の灰白質の作用により、外部より來る刺戟を直に運動
神経に傳へ、以て意識なき運動を起さしむ。之を**反射運動**

といふ。解剖に於て、腦を除去せられたる動物が刺戟に應じて跳躍する類は脊髄の反射運動にして、眼瞼閉鎖・噴嚏等は延髄の反射運動なり。

三、神経 單に神経といへば普通に神経纖維を意味す。即ち白質にして、刺戟の傳達に任じ、或神経は腦脊髄の刺戟を筋肉に傳へて運動を起し、他の神経は外部の刺戟を傳へて脊髄・腦に至る。彼を運動神経、此を感覺神経といひ、その腦より直に分支せるものを腦神経、脊髄より分支せるものを脊髄神経といふ。運動神経の分布せる筋肉は、腦髓・脊髄の刺戟によりて、有意又は無意の運動を起すと雖も、この神経の分布せざる部分は然ること能はず。

感覺神経は、その分布せる部分の一局部なると、身體全體な

るとにより、特殊感覺神経・普通感覺神経の二種にわかたる。特殊に屬するものは、視・聽・嗅・味の四にして、眼・耳・鼻・口にその末梢を置けり。これ等刺戟を受くる機關を感官といふ。

普通に屬するものには、觸・溫・痛・筋の四あり、いづれも身體の局部によりてその分布に疎密あり。痒覺及羞縮覺には特別の神経なく、觸・痛二神経、同時に或種類の刺戟を受くるによりて生ずるならんといふ。生理的心理學の告ぐる所によれば、特殊普通の諸神経は、いづれもその定まれる刺戟に非ざれば傳達の職を務めず、視神経は觸覺を生ぜず、觸神経は寒溫の刺戟を傳達せざるものなり。こゝに奇態なることは、視神経の損傷せられたる人は、多くは聽神経觸神経の鋭敏を加ふるものなるに、嗅神経の損はれたる人は、その味

覺を併せ寄せらるゝ事是なり。

四、神経系統と心意作用と 心意作用と神経系統の活動と相伴ふことは、實驗上既に争ふべからざる事とす。されども、その詳細は未だ知るべからず。唯一般の假定によれば、

一、感覺神經刺戟を傳へて腦に至れば、或局部の大脳皮質に變化を生ず。之を印象といふ。刺戟が腦に印象するときは、こゝに感覺といふ心意作用起る。

二、印象は長くその痕迹をとゞめ、新に來る印象と相融合して、之に伴ふ心意作用をおこす。

三、同時に腦の數局部に印象あるときは、之を結合せる第一二次的の印象おこり、之に伴ふ心意作用生ず。

四、同様の關係にて三次的以上の印象起り、よりて以て一

印象と他印象との複雑なる結合をなす。

五、腦の或局部は、外物の刺戟に關係なく、身體又は腦活動の状態に就て活動をおこす。

六、腦の一局部の活動は他の局部の活動に影響す。

七、智情意各種の心意作用は各々相異なる腦の局部の活動による。

等なり。

一、身體中觸温痛覺を備へざる部分ありや如何。

二、口中に筋覺神經ありや。又其は如何なる用をなすか。

三、寒中指尖のかじけるは如何なる事由によるか。

第三篇 心理學本論

第一章 心意作用總論

一、心意諸作用の分類 脚下に春草茂り、眼前に花雲の靉靆たるを見れば、人はその美景を喜び、歩を移して花の下に到らんとすべし。又親故の訃音によりて、憂心忡々の情禁じ難き時は、人は必ず直に走せてその家を訪はんとすべし。今これ等の心意作用を検するに、春草を見、花雲を望みたるは、親故の死を知りたるは、その事實を異にすれども、其心意作用は等しく是れ知るといふ作用なり。一は喜び、一は悲しむ、その性質異なりと雖も、共に是れ感ずといふ作用なり。花を手折るも、死を吊するも、同じく願望の實行なり。之を知情意といふ。知る事に始りて知るといふ性質を離れざる諸作用には、思出す事想像すること考ふる事等あり、之を

知性作用と總稱す。喜怒哀樂等は之を感情作用と總稱し、願望及その實行等は之を意志作用といふ。凡百の心意作用も、その性質によりて區別すれば、この三種の外に出づるものなし。

二、心意作用の二重性 事物を見聞すれば、その事物を知ると同時に、その事物を知りたることを識り、喜びの感をおこすときは、喜びすると同時にその喜びすることを識り、決意によりて事を執るときも、亦それと同時に、自らその決意し、又その事を執れるを識る。この知情意に通じて存する所の識る作用は既に上に述べたる意識作用なり。この點に於て、三種の作用は二重性のものなりといふことを得べし。三、意識の性質及注意 意識はその性質、知に屬す。識なき

ときは、たとひ我心に作用をおこすとも、我之を知らず、知らざれば、記憶するによしなく、記憶なければ、考ふることにも不能なり。されども、知情意と區別するときの知には非ず。何となれば、意識は知にも、情意にも、同様に必ず含まれ居るものにして、之を缺けば、いづれも心理學に論ずる所の心意作用を成立せず、又これらを離れて、意識獨り存在することなければなり。

知情意の各作用互に去來して、心生活を繼續する間、之を一貫して存在するものは意識なり。此に於て、意識は心意の諸作用を結合し、統一する地盤をなし、前に甲を見、今乙を見る、最初に泣き、次に笑ひ、今思ふ、杯と考ふる事を得。この點に於て、意識は心意の主と見るべき、我といふ考への由りて

生ずる所なり。意識はまた、この作用をも識り、かの作用をも見るといふ點より、心眼とも稱せらる。

意識は、全體の腦の活力と刺戟の強さによりて、その明不明をなし、又快感及決意によりて左右せらる。畢竟意識の明不明は、即ちその心意作用の強弱を示すものなれば、意識の明瞭は極て希望すべき事とす。而して決意によりて意識の明瞭なる状態(換言すれば、その心意作用の強盛なること)を故意注意といひ、刺戟の強度又は腦力の充實によりて然るものを無意注意といふ。不注意といふは、その心意作用微弱にして、意識が他の作用の上に存するか、若しくは、腦力全體に疲勞せる状態にして、注意散漫といふは、同時に二三の心意作用存在し、その何れも特に強盛ならざる状態なり。

一、古に「心こゝにあらざれば見て見えず聞いて聞えず喰らうて其味を知らず」と云へり。之を心理學的に説明せよ。

二、嬉しと思ひて披き見れば、思ひもよらぬ古冊子なり。ともかくも讀みて見んと思ひて讀みゆけば……に就て、心意作用の種類を言へ。

第二章 知性作用

第一節 感覺

一、感覺の種類 生理的心理學の告ぐる所によれば、光線と稱する一種の刺戟來りて眼球に作用するときは、網膜の上に分布せられたる視神經末梢先づ之に反應し、傳へて大脳皮質に至る。若しその光線適當なる強度を有するときは、この刺戟に應じたる心意作用おこる。之を眼の感覺といひ、又視覺といふ。聽覺・嗅覺・味覺・溫覺・痛覺・筋覺等推して知

るべし。又、物體を扛げ、又は押しなどするとき、その筋肉使用の度合及方向覺知せらる。之を筋覺といふ。筋覺は長く、筋肉を使用せし後におこる痛覺若しくは疲勞の體感抔と異なれば、混同すべからず。

感覺は知性作用の最も簡單なるものなり。

二、觸覺・痛覺・溫覺 觸神經末梢は、身體外皮の全部及口中抔に分布し、視・聽・嗅・味の如き特別機關を有せず。而してその分布の最も稠密なるは舌指頭内面及唇にして、コンパスの兩尖頭を以てたやすくその然るを試験し得べし。觸覺は多少の筋覺と共動して物體表面の粗滑・堅柔・鬆密を感別し、尙ほ筋覺に附從して物體の大小・形狀を感別することにあづかる。幼兒が好んで物をつかみ、且つ之を口にすることは、少

からずこの感覺を練習するものなり。温覺の神經末梢も亦重に外皮及口中にありて、唇邊及腋下などに於て最も稠密なり。痛覺神經は皮膚、筋肉、内臓等すべて血液の循行せる身體全部にあり。この感覺は一に又體覺といふ。或は外物の刺戟により、或は身體の適當なる組織を失ふによりて起る感覺にして、飢渴、飽滿、呼吸塞迫、頭痛、折衝等の如き是なり。これら體覺の總合より、すべての心意作用に影響するものを氣分といふ。

三、筋覺 筋覺の神經は、すべて運動する所の筋肉中に存す。手足、眼瞼、舌、唇、喉頭、頸等の諸筋肉は、その分布の最も稠密なる所なり。筋覺はその本務として、筋肉運動の方向と度合とを感別し、觸覺の補助によりて、物體の大小、形狀をも覺知

す。物體の大小、形狀は、大人にありては眼によりて之を覺知すれども、その初は、手足の運動の方向と度合との感覺によりてのみ知ることを得るものなり。頭を廻らして音の來る方を知り、眼瞼を上げて物の高位にあることを知る類は、みなその筋肉覺と視覺聽覺との連合によりて、始てなし得るものに外ならず。

筋覺はまた物體の運動を感覺するものなり。動ける物體に手を附托すれば、我之を動かすにあらずして、手自ら動き、而してその方向、分量、遲速等を感知す。眼瞼の筋覺に於ても同様なり。運動せる物體來りて、我皮膚面を擦過する場合にも、その受動的に刺戟を受くる事と、その刺戟を受くる部位のかはりゆくことによりて、物體の運動を感覺し得

べし。

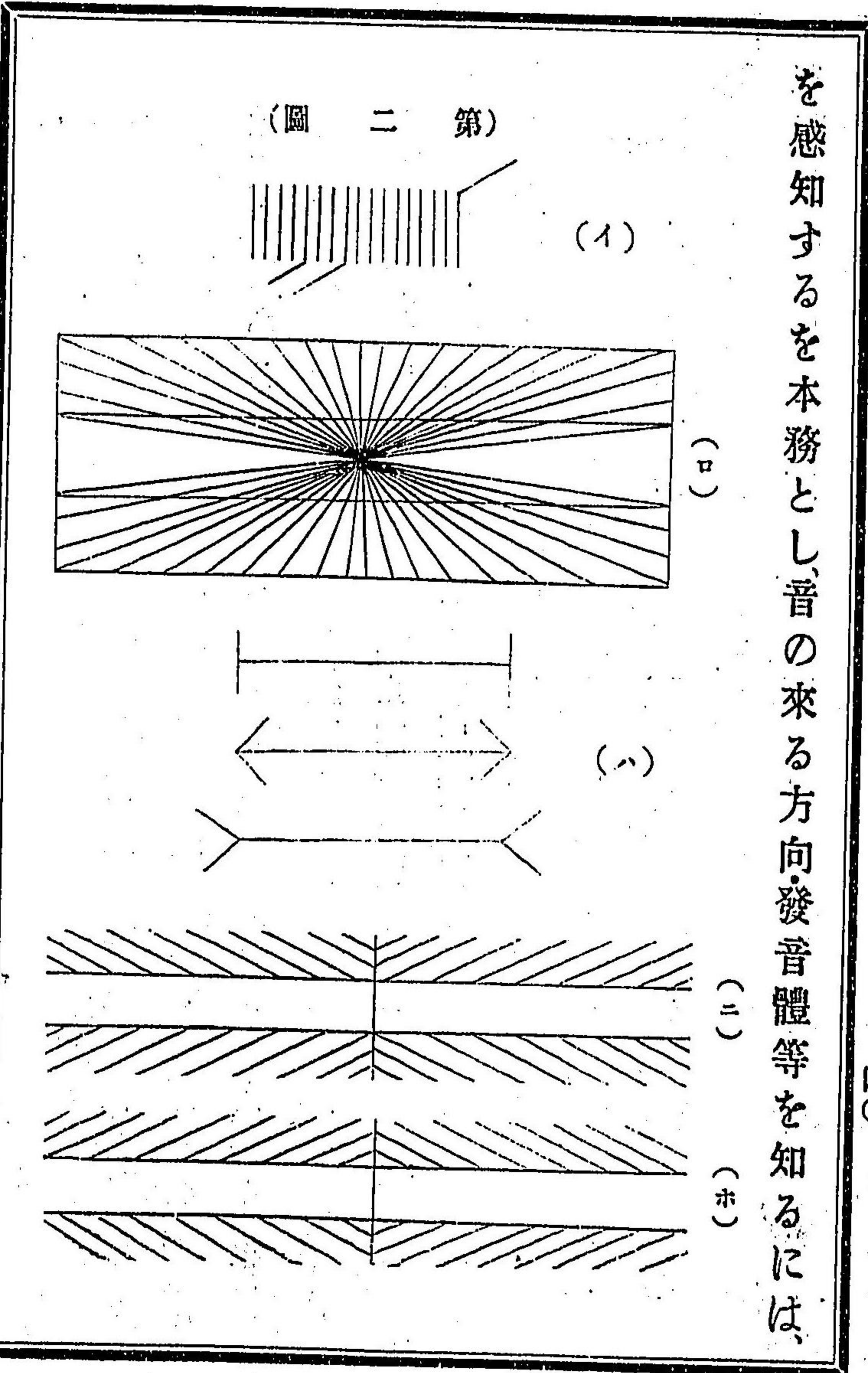
四、視覚 視覚の機關は眼なり。眼は明暗と色彩とを感知するを本務とし、物體の形状・大小・遠近を覺知するには、必ず手・足・頸又は眼瞼の筋覺と連合せざるべからず。唯方位は網膜上に映ずる影象の位置によりても、多少之を知る事を得。生れて盲なりし人、一旦視覺を得るに際しては、球と圓盤とを識別する能はず、又近くにある小物體とや、遠くにある大物體とを分つ能はずといふ。パノラマに於ては、普通人と雖も、略ぼ之に類することを認め得べく、以て眼のみにては物體の形状・大小・遠近を知る能はざる事を證すべし。眼の迷覺と云ふ事あり。何人と雖も正しく感覺する事能はざるものにして、その原因は、同時に生ずる他の感覺に妨

げられ、相混ざるによるなり。(第二圖)

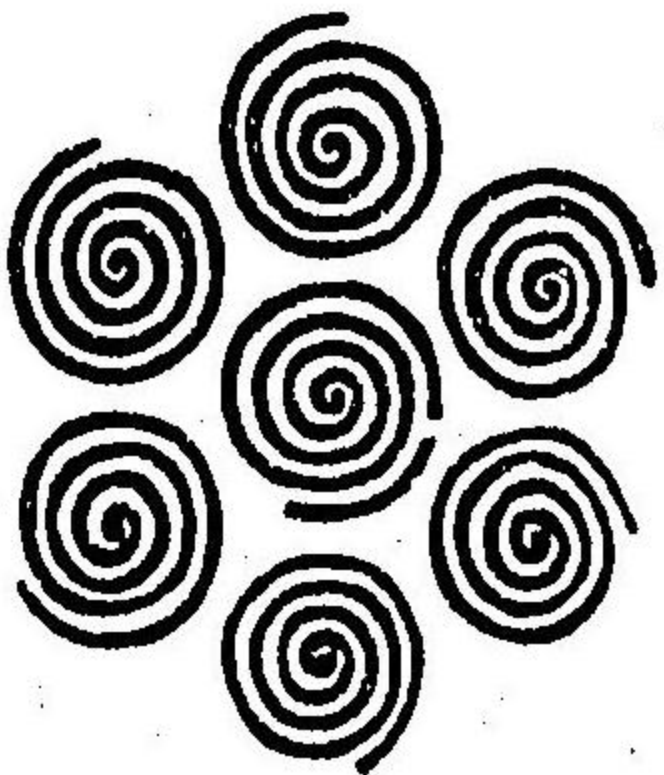
視覺の後像といふことあり。一物體を凝視したる後、眼を他の白色面上に轉ずるか、又は單に眼を閉づれば、その影像尙ほ眼中にあるもの是なり。最初同光彩に見え、後白色は黒色に、赤色は綠色に見ゆ。網膜上に於ける印影、暫時消えざるが故に、最初同光彩に見え、印影將に消えんとするに至りては、その光彩著しく減じて、比較的、殆ど原光彩の反對となり、因りて反對光彩の感覺を生ずるならんといふ。後像に於ける物體の形状は、原物に異なる事なし。七色圓板の白色に見え、一點の火を振廻して闇中に光環を畫き得る類は、皆これによるなり。(第三圖)

五、聽覺 の機關は耳なり。耳は音響の高低・大小・音色・長短

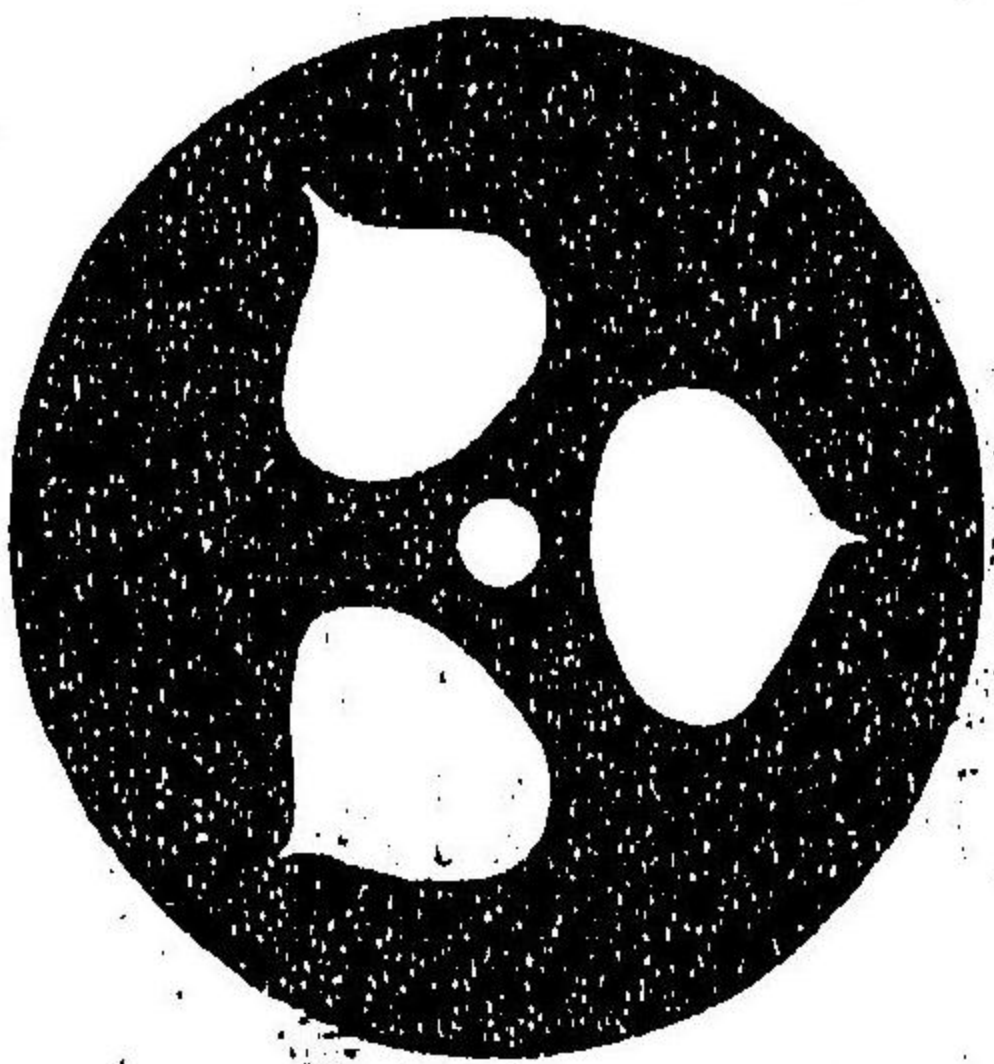
を感知するを本務とし、音の來る方向・發音體等を知るには、



(圖 三 第) (1)



之を見ながら徐にゆりまはして試よ。



太陽の光線に於て暫く之を見つめ、さて眼を閉ぢ、又は白色の壁などを眺めよ

必ず筋覺・視覺の連合を待たざるべからず。
六、味覺・嗅覺 味覺神經は舌及口内諸粘膜にその末梢を置く。辛・鹹・甘・苦・澁・酸・鹼等の感別あり。その他諸種の感覺を生ずと雖も、未だこれらに附せられたる名稱あらず。
嗅覺神經は鼻腔内の粘膜にあり。諸種の感覺を生ずと雖

も、特にその名無く、「麝香匂」アムモニヤ臭などその發香物の名を以て呼ばる。味覺神經は液體物よりするにあらざれば刺戟を受けず。嗅覺神經は氣體のものよりならざれば刺戟を受けず。この二覺は身體の衛生上極めて重要な職務をなすものなりと雖も、知識收得の上には遙に視・聽・觸・筋諸覺に劣れり。

七、感覺一般の形式 刺戟の感官に接著する模様によりて生ずる感覺あり。例へば「久しく見ゆ」「疾く走る」「急に起つ」等の久しく・疾く・急にの類是なり。之を刺戟の模様の感覺といふ。

感覺を生ずる所の刺戟は、普通外物の有する所たり。この刺戟はその質を異にするによりて異類・異種の感覺を生じ、

その量を異にするによりて感覺の強弱をなす。音響と光彩・光彩と輕重との如き之を異類の刺戟といひ、赤色と綠色若しくは高調音と低調音との如き之を異種の刺戟といふ。同じ低調音にも大小あり、同じ赤色にも濃淡あり、此は同種の刺戟の多少によりて分るゝに外ならず。物理學によれば、異種の各刺戟は、皆同じく微分子運動の多少によりて別をなすに過ぎずと雖も、之を刺戟の分量といふは非なり。赤色と綠色、高調音と低調音との如きは、微分子運動の多少によりて生ずる異質の刺戟にして、同種の刺戟の多少にはあらざるなり。

刺戟が感覺を生ぜんには、一定の強度即ち分量と、一定の時間とを要す。時間餘りに短きときはたしかなる感覺を生

ずるに足らず、餘りに長きときも亦然り。射られたる矢の眼にとまらず、衣服の身體に觸れ居るを感覺せざる類、又は蕃椒も久しく用ふれば辛からざる類是なり。之を感覺の惰性といふ。一定の強度を必要とする例は、一滴の屋溜は聞えざれども數多集合すれば聞え、五尺さきの懐中時計の音は聞えざれども三尺以内にありては何人にも聞こゆるが如し。されども、感覺は識作用を必要とするが故に、既に前章識の性質(前章第三項)に於て述べたるが如く、無意故意の注意の有無によりて、一定強度・一定時間の刺戟は、必ずしも一定度の感覺を生ずといふべからず。又多數の刺戟競争して來るときは、その中の強度時間最も適當にして、無意故意の注意最も大なるもの感覺せられ、他のものは意識に上ら

ず。晝間星を見ず、鹿を追ふ獵夫が山を見ざる類是なり。之を感覺の適者生存といふ。又異種の感覺同時に生ずるときは、合一してそのいづれにも異なる一種の感覺を生ず。例へば樂器の二重音・四重音、若しくは赤色末と綠色末との混合に於けるが如し。之を感覺の融合といふ。一感覺について他の異種の感覺生ずる場合は、後者は兩感覺の相異なる度以上の昭明を致す。例へば、澁苦の感じの後に於ける甘味の感じは、その刺戟の強度に踰えて昭明なるが如し。白顔と黒髮と、紅葉と松緑との如きにも同じ關係あり。之を感覺の對比律といふ。同一刺戟反復して到達するとき、初は昭明に、次は弱く、復強く復弱く、循環して感受せらる。例へば時計のチクタクを聞く場合の如し。之

を感^レ覺の弛張律といふ。神經又は腦の異狀により、その本然の刺戟なきに感^レ覺を生ずることあり、之を幻覺といふ。眼球を壓迫して光を見る類是なり。

感^レ覺はすべて實地實物に接するにあらずばその眞を得べからず。これ教育に於て實物教授を重んずる所以なり。

- 一、痛覺によりても亦知識を得る場合あり、その例を示せ。
- 二、色盲又は樂音聾といふものあり、いかなるものなるかを知れりや。
- 三、聾は聞えざる汽車の音が夜になれば聞ゆる理如何。
- 四、誰れも聞きたる大雷鳴をその中の一人聞かずと云ふことありや、如何
- 五、幻覺の他の例を示せ。幻覺と迷覺との別如何。
- 六、一方の眼球を押して上又は下に轉せしむれば、物體が二重に見ゆる

理由如何。

- 七、感^レ覺をあらはす語は、文法上の何品詞なるか。
- 八、我國にては「指尖がつめたい」などといひ、西洋諸國にては「指尖に於てつめたい」と言表はす。いづれが適當なるか。

第二節 知覺

一、知覺 溫熱を有する物體が吾人の皮膚面に接近するときは、溫覺神經の傳達によりて腦に印象し、よりて「溫し」といふ感^レ覺を生ず。されども、此時未だ必ずしも或外物の作用によりて然ることを思惟せず、感^レ覺は或は單純なる感^レ覺として存留すべし。然るに、もしその溫熱を有する物體皮膚面に接觸するときは、吾人は、その觸れたる物が溫熱を有し、その作用によりて感^レ覺を生じたることを思惟す。かくの

如く、感覺によりて外物を知る作用、換言すれば感覺の戟因を或外物に歸する作用を知覺作用といひ、その結果として心意内に存留するものを知覺寫象表象・心象又は觀念などと稱す。知覺は、元來同一地點より同時に來る二種以上の刺戟に伴ふ二種以上の感覺の結合によりて起るものなれども、生長したる者によりては、一感覺を直に或外物に歸するを常とす。これ過去の經驗より類推するが故なり。知覺の完全は固よりその感覺の良否によると雖も、又その結合せらるゝ感覺數の多少による。故に空氣の如きものゝ知覺は、遅くして且つ甚だ漠然たり。知覺に二種あり。物體の知覺と現象の知覺と是なり。物體知覺のうち特にいふべきは自體の知覺とす。

二、自體の知覺 幼兒が如何にして、自體と他の物體とを區別して知覺するかを考ふるは、聊か趣味ある事なり。手を以て外物に觸るゝ時は、唯手に於て觸覺を得るのみなれども、己が身體に觸るゝ時は、雙方に於て觸覺あり、溫覺あり。而して烈しく觸れたるときは、手よりは抵抗の筋覺生じ、その觸れられたる部分よりは痛覺を生ず。蓋し身體の各外部に分布せられたる觸・溫・痛の感覺神經は、その刺戟を受くる局部に就て明瞭なる感別あるが故に、腦の活動によりて起る感覺も、恰もその刺戟を受くる局部に於て生ずるが如き思あるなり。又手足の如き運動神經の分布せる筋肉は、自己の意志によりて直に運動を起せども、外物は然らざるなり。これらの事情よりして、人は夙に自體と他物とを區

別し、自體を以て「我」と最も密接なる關係あるものとなす。否な、無教育のものは、實に自體を以て、全く「我」として怪しまざるなり。この故に、手又は眼に觸るゝこと少く、又運動すること無く、隨て外物に刺戟せらるゝ事も稀なる腹部・胸部の如きは、自體として知覺せらるゝ事遅く、且つ不完全なり。幼兒の人體畫を見て、その然るを知るべし。

三現象の知覺 物體の現象と總稱するうちには自ら二者あり。一はその物體を組成するに缺くべからざる質・形状・色彩の類にして、形質又は屬性と稱するもの、他はその物の呈出する物理的現象若しくは化學的變化なり。或は前者を靜現象といひ、後者を動現象といふ。靜現象と名づけたる所以は、その常住不變的なるが故にして、動現象といへる

は之に反するが故なり。これらの現象は皆物體にあらず。されども、靜現象は物體を組成する一要素として知覺せられ、動現象も亦一種心外に存する事象として知覺せらる。特に火・光・熱・音響・磁氣・電氣の如きは、普通に物體以外の一個の無體物と見做さるゝものなり。

現象の知覺は、前にいへる、一感覺の戟因を或外物に歸するものとは異にして、戟因そのものを一外物と思惟する事なり。例へば或物體の赤色を瞥見したるのみにて、或赤色のものと思惟するは前者の例にして、夕やけの雲の赤さは朱よりも濃しなどいふ赤さ、又は赤と黄とを混ずれば橙黄となるの「赤」などは後者の例なり。馬車といふは物體知覺にして、その「進行」といふ「速度」といふは現象知覺なり。文法上

にいふ所の抽象概念といふものは、すべて静現象又は動現象の知覚の名なり。

五、知覚一般の形式 知覚は、物體現象を感知し、謂はゆる宇宙の森羅萬象を收めて之を心内の所有となすものなれば、感官不具にして完全なる知覚を得る能はざるものは、實に知識の靈窓を缺けるものといふべし。

物體は皆その部分を有す。例へば禽獸には頭・首・胴・足等あり。草木には枝・葉・根・幹等あるが如き是なり。これらの各部分は、各、それぞれの物體として知覚せらるゝが故に、從て全體の概念と部分の概念との別をなす。

事物の名稱は、人間の作れる言語の一部にして、事物に附屬せる現象にあらず。されども、人は之によりてその感覺・知

覺を表出する事を得、凡そその心意作用あれば殆ど常にその聲音を聞くが故に、事物と名稱とは終に相離るべからざるものとなり、名稱は則ちその事物なるかの如き感あるに至る。

感覺・知覺は、直接に實物に接すれば自然に起る作用にして、かつ直接に實物に接するによりてのみ得らるゝものなれば、一に之を直觀ともいふ。

一、昔時、教育といへば書を教ふる事と考へたる誤を批評せよ。

二、單に見聞すると觀察するとの別如何。

第三節 記憶

一、記憶 感覺・知覺は、一たび意識を去ると雖も、敢て全く無に歸せず、時ありて再び意識に上り來る。之を記憶といふ。

二、記憶の内容 は總じて觀念と稱せらる。されども之に二別あり。即ち一は嘗て意識に上りたる心意作用そのもの復現にして、感覺・知覺其他之に類する心象、他の一は、或心意作用が嘗て意識に上り心生活の一節をなしたる事の記憶なり。例へば、前者は名を聞きてその物を心に浮べ、又はその物を見てその名を思出だす類にして、後者は嘗てその物を見、その名を聞きたる事の思出ださるゝ類なり。この後者に屬する種類には、嘗て悲しく感じたる事、若しくは何事か爲さんと決意したる事等の復現も含まる。これらの場合に於ては、必ずしも再び悲しく感ずるに非ず、却てその同じ事に就て嬉しく感ずる事あり、又必ずしもその決心に立ちかへるに非ずして、唯嘗てさる心意作用のありし事を

復現するのみ。

以上の如きを以て、觀念なる語は、廣狹二様の意義を以て使用せらるゝ事知るべし。即ち狹義の觀念は既に上に述べたる感覺・知覺の存留物にして、廣義の觀念は實に心生活のいづれの一節をも意味するもの、換言すれば過去の意識の全部を指稱するものなり。

三、觀念復現の事情 觀念の復現する場合は凡そ左の三つに分たる。則ち第一は直觀に連合せるより起る場合に於て、例へば他人の言語を聞き、若しくは試験問題を見て或觀念を復現し、答案を起草する類なり。第二は他の復現觀念に連合せるより起る場合に於て、或馬を復現するによりて、その馬丁を思出し、若しくは、右の答案を起草するに方り、嘗て

その事項を學びたる時の教師の態度・辯舌を思ひ起す類なり。第三は腦に印象する事至て深く、隨て意識の極て強大なりし觀念は、他の如何なる觀念にも優りて時々念頭に復現することにして、例へば父母の訃音の如き、若しくは兒童が明日の運動會の爲に、夜もよく睡眠せず、朝になりて先づ第一番に之をいふ類是なり。

四、觀念の連合 觀念の連合は、その數觀念を同時に意識するによるものなるが、之に二種の場合あり。一はその觀念がすべて直觀なる場合、二はその中の一方又は雙方が共に復現觀念なる場合これなり。直觀なる場合には、言語と事物との連合、一全體とその各部分との連合、及共存物若しくは繼起事物の連合あり。一方又は雙方が共に復現觀念な

るものには、類似物の連合、大差異物の連合、一事物を中心とせる物の連合あり。今之に就て少しく述べんに、

一、言語と事物との連合 この連合は極て強固なるものにして、又至て必要なるものなり。例へば、觀念若し外物の寫眞ならば、言語は實にその「焼付紙」にして、これなき觀念は外部に對して發表せらるゝ能はず。自己心内に於ても亦頗る不明瞭たるを免れず。

二、全と分との連合 之に二別あり。則ち一は一事物とその現象、又は現象とその模様との連合にして、他は一事物とその各部分との連合是なり。この後の場合の連合なきときは、之を一事物と知覺すること能はず。

三、共存又は繼起事物の連合 例へば山に木、海に帆の如

き共存物、又は夕立につゞく夕虹、失火に伴ふ警鐘の如き是なり。其間に因果の關係の有無に拘はる事なし。

四、類似物の連合 雪の白きと綿の白きとは、相似たりと言はんよりも寧ろ同一なりといふべきものなり。故に雪の白きを見ればその「白し」といふ感覺を主とする所の綿の觀念亦復現し來り、因て雪と綿と相連合す。

五、大差異物の連合 例へば、物の「短し」といふは、暗に「長き」に比べて始めて領解し得るものなれば、通常大差異又は反對といふものは、全く相対比較的のものなり。故にその二物は相離れざる關係を生ず。男といへば女子供といへば老人、皆この理によりて相連合す。

六、一事物を中心とせる連合 故郷の山に、花を尋ね、鳥の

巢を捜し、ことあり。又野果をあさり、菌を狩りたる事あらば、それらの諸觀念は、すべてこの山を中心として連合せらるべし。そは春遊と山とは共存によりて連合せられ、秋行と山と亦同様に連合せられ、隨て兩遊又相連合するなり。

これら觀念の連合は、記憶及それ以上の知性諸作用に對して、極めて必要にして、延いては又品性の形成に、少からず關係するものなれば、教育上に於ては大に留意するを要するものなり。

五、記憶の種類 觀念の連合により、若しくは觀念の特に強盛なるが爲めに、容易く復現するは、心理上當然なる記憶にして、之を論理的記憶といふ。之に反して、殆ど何等の觀念

なしに、言語の長き引續きを反復する類を**反射的記憶**といふ。兒童が「いろは」或は「アイウエオ」を記え居る類是なり。又**人工的記憶**といふものあり。或觀念を記憶せんが爲に、假にその符牒を設くるものにして、例へば、源頼朝以後の源氏の血統を記憶するに、各その名の頭字をとりてヨ、ノ、ヨ、カ、ク、頼朝、義經、範頼、頼家、實朝、公曉とすることが如し。教育上に於ては、時に反射的記憶によるべきことあれども、人工的記憶は殆ど用ふる所なし。蓋し人工的記憶は、たまく、試験に應ずる場合などに必要あるべしと雖も、固より眞に心意の發達に益あるなく、且つその符牒そのものを忘却するを防ぐ能はざればなり。

六、記憶一般の形式 記憶の良否を制限する事情四あり。

その中二個は、觀念が最初意識せられし時の状態に關し、他の二個は、之を復現する時の状態に關す。即ち

- (一) **最初の印象の強弱** が記憶の良否をなす事は、既に本篇第一章中に詳述せる所なり。
- (二) **觀念連合の良否** 最初強く印象すと雖も、孤立にして觀念の連合なきときは、記憶良好なる能はず。
- (三) **最初の意識より復現する時に至る時間の多少** 多く時間を経る時は、到底完全に復現せられざるに至る。これ教育上にて「忘れざるうちに復習せしむる」を要する所なり。
- (四) **復現せんとする時の心意状態の適否** 思出たさんとする意志強く、若しくは思出す事に於て愉快を感ずるが如

き時は記憶良好にして、危惧・憂愁の感情若しくは感官を誘導する他物が目前に存在するときなどは、復現作用甚だ困難なり。心身共に疲勞若しくは衰弱せる場合の如きも、亦固より不良なり。但しこれらの事情は、獨り記憶に限りたる事に非ず。

感覺・知覺作用を直觀又は覺性作用といふにむかへて、記憶は記性作用といふを得べし。記性作用は直觀作用と共に高尚なる知性作用の基礎なり。

一、三伏の暑熱にて「熱い」といふ際、通常人は何を復現するか、又その理由如何。

二、松の繪を見れば之に伴ひて何を復現するか、又その理由如何。

三、傾解せざる事を記憶せんとするは何と名づけらるゝ記憶なるか、且

つその恐なる所以を論ぜよ。

四、子等は如何にしてよく記憶せんと欲するか。

五、印象と表象心象との區別如何。

第四節 關係の認識

一、關係の認識 事物が、その有する所の屬性によりて人類の感覺を起し、因りてまたその事物として知覺せらるゝ事は、既に前第一節及第二節に於て述べたる所にして、それらの感覺知覺は、一旦意識を去ると雖も、尙ほ長く心内に存留し、時ありて意識に復現し來ること、亦前第三節に述べたる所なり。これら個々の觀念中には、符號と實物との關係あるものあり、全と分との關係あるものあり、共存の關係あるものあり、繼起の關係あるものあり、類似の關係あるものあり。

り、反對の關係あるものあり、中心と枝葉との關係あるものあり。これらの關係を意識するを關係の認識と名づけ、その結果を思想といふ。例へば或花とその色彩との關係を認めて「この花は赤し」「この花は白からず」などいふ類是なり。關係の認識は、自ら前節にいへる觀念の連合を生ずど雖も、觀念の連合は必ずしも關係の認識の結果に非ず。例へば春圃の麥綠、菜黃、紫雲英を望見する時は、嘗て之と彩氈との類似の關係を認識したることなしと雖も、人は忽ち後者を懐ひ起すが如し。されば、連合は必ずしも關係の認識を必要とせず、又固より關係の認識そのものに非ざる事知るべし。

二、關係の種類及性質 觀念の關係は即ち事物の關係にし

て、その種々雜多なること枚舉に違あらず。例へば星と土との如きその間に殆ど何等の關係なきが如しと雖も、「星は土より遙か離れたる上にあり」「星は土のうちに礫あるに似たり」などの關係數多あり。これらを前に出でたる全分の關係、共有の關係等の數種に區別するは、極て大凡の事にして、寧ろ便宜上のものに過ぎずと知るべし。觀念の關係は實に種々雜多なりと雖も、そのいづれにも通じて存する關係の性質、それ自身について區別すれば、實に一致と不一致との二に出でず。「これは木なり」「この木は梅の木なり」「この梅は紅梅なり」「余は行かんと欲す」「余は悲しく感ぜり」「明日は晴天なるべし」などは、いづれもその一致を認識せるものにして、「これは櫻にあらず」「余は止るを欲せず」「明

日は雨天ならざるべし」の如きは、その不一致を示せるものなり。一致の認識を肯定といひ、不一致の認識を否定といふ。

三、関係の認識と類化及認容 各種関係の中に就て、類似の関係の肯定を指して特に類化といふ事あり。そは類似の関係ある新概念をその舊概念に融合する點より名づけたるものなり。又之を認容ともいふ。そは舊概念が新概念の同類たるを認めて、その系統に許容するの意にとれるなり。但し類化認容を関係の認識と同意に使用せるもの無きに非ず。教育上頗る注意すべしとなす所の類化認容は、宜しく後者の意にして、廣く思想の發展に關するものたるべきなり。

四、関係の認識に關するその他の事 思想を言語に表出せるものは、言語學上にいふ所の文にして、事物の名詞・形容詞・副詞の如き單語に非ず。論理學上にては、関係の認識を斷定といひ、その表出を命題といふ。

思想は、その最も簡單なる形に於て二個の概念を含み、複雑なるものに至りては、實に多數の概念を含むものなり。例へば「兒童太鼓を打つ」「兒童太鼓を強く打つ」又は「雁、秋の晴れたる空を群をなして北より飛來る」などの如し。多數の概念を結合せる思想は、無教育者には明瞭に了解せられず。之を明瞭に了解せしめん爲には、その最も簡單なる形に於て存すべき二個の概念の結合となすを要す。言語學上にては之を文の要領といふ。

思想も亦記憶せらる。然るときは、是亦廣き意味の觀念といふ中に含まる。

一名詞形容詞副詞動詞は心理學上の何を表出するか。

二「某は愚なり」「某は賢ならず」「彼は賢なり」「彼は賢ならず」

右の肯定否定をいへ。

三關係の認識は、全く記憶なくては成立たざる理由を述べよ。

四、四個の觀念にわたれる命題を作れ。

第五節 關係觀念

一、**觀覺を超越せる觀念** 物體現象並に現象の模様は、皆感覺に基いて知覺し得る在外物象なるが、時・空間・我・神の如きものは、到底、單一なる感覺によりて知る事を得るものに非ず。此等は全く、事物の關係の認識より生ずる一種の知覺

にして、之を**關係觀念**と名く。

二、**時の觀念** 「時」は、通常、晝夜を以て、感覺によりて之を知る事を得るが如しと雖も、その實は、晝と夜との如き二個以上の觀念の意識に上る前後の關係を認識するによりて、始めて認めらるゝなり。蓋し一物を知覺し、又他の一物を知覺するのみにては、唯二個の知覺を得るのみにて、その間に未だ新舊前後の關係を認むるに至らずと雖も、二觀念が交替して意識に上る状態を認識する場合に於ては、例へば「此人はこの前にも來たる人なり」など、必ず過去・現在・舊新・前後を認めざるを得ず。而して前後の觀念は則ち**時の觀念**なり。

三、**空間の觀念** 空間は、通常、物體面の各部を感覺するによりて直に之を知り得るが如しと雖も、その實は、是亦數多の

觀念の同時に意識に存在する關係を認識するによりて、始めて認め得るものなり。蓋し物體面の一部を一部として知覺するには、その中に既に他部との關係の認識を含み居るものにして、一物の各部若しくは數多の物體の刺戟が同時に我感官の前に存在する關係を認識するに於ては、人は自ら方向・距離即ち地點の無數を認めざるべからず。而して地點の無數の觀念は即ち空間の觀念なり。

四、我及神の觀念 感覺によりて知覺すべき「我は、我身體にして眞の我にあらず。眞の我は、全く心意上のものにして、關係の認識によりて始めて認めらるゝものなり。蓋し或物を見、感じ、意志する場合に於ては之を見たるものが感じ、之を感じたるものが意志すと認識せられ、よりてその見、感じ、

意志する主體の觀念生ず。即ち我の觀念なり。

神の觀念も亦關係の認識に基くものなり。即ち關係の認識によりて、すべての現象にはその主體あることを知り、特に人體内に心意存し、「我」なる最奧主體の存する事を知るに及びて、或は萬物の中に萬主體を認め、或は萬物の上に一主體を認む。是れ即ち神の觀念なり。

各人の主體即ち我は、萬物に對して心的并に身的の諸動作をなす本源なり。故に之を主觀とも稱し、萬物は之を客觀ともいふ。

關係觀念は尙ほ他にも數多あり。今は唯その一斑を示せるのみ。

一、以上の外關係の認識により起る超感覺的觀念の二三を擧げよ。

二力は單純に知覺し得るものなるか如何。

第六節 概念

一、概念 物體とその屬性との關係を認識して、或物體が光るとか、又は堅しとかいふ思想を生ずる事は、既に前第四節に於て述べたる所なり。各種の物體に就て、それぞれ異なる思想を生ずる時は、例へば「四足を有し全身に毛ある生物には、犬・猫・鼠・牛・馬・狐・狸・鹿あり」と類似の關係を認識し、従てまた「これらは獸といふものなり」杯の思想生ず。この獸といふ觀念は、一個體の觀念にあらずして、同じ屬性を有するすべての物に適用せらるゝ觀念なれば、單に觀念と呼ばずして概念と稱す。されば、概念も亦關係の認識に基くものに

て、感官を以て直に知り得べき觀念にあらざる事知るべし。
二、概念構成の順序 概念の生ぜん爲には、先づ事物の知覺なかるべからず。されども、單なる知覺にはあらずして、事物とその現象との認識あるを要し、「これはかく／＼のもの」「かれはしか／＼のもの」と考へざるべからず。すべての事物に就てかく認識するとき、そのうちの相類似するものに就ては自ら類似の關係を認識す。かく類似の關係を認識するとき、は心意作用は更に進みてこれらを一團の物と見做し、その一團に名稱を附す。この數多の事物を一事物の如く認むる作用を概括作用といひ、その一類のものに名づくるを命名作用といふ。概括作用によりて數多の事物を總括する觀念(即ち概念)生じ、命名作用によりて概念の寄

托所たる名稱を得るなり。「概念は言語を離れて存在し難し」といふ事は概念に於て特にその然るを見る。

三、**科學的概念** 前に記する所は、通常人の構成する概念にして、多くは外形の相互の類似と、他の事物とを區別すべき外形の特徴とによりて構成するものなるが、科學的概念はその類物に就て、十分なる觀察を要す。十分なる觀察とは、あらゆる場合に於てそのものを觀察し、單に外見によらずして内部解剖の手續にまで及び、感官の及ばざる所は顯微鏡・試験管の力を籍り、主としてその構造・組織成分等、最も不可變的なる屬性を抽象し、他の可變的屬性を捨象して概念を構成す。この故に、俗人は、その水中に棲む習慣と、外形の似よりたるとを以て、鯨を魚類とし、博物學上にては、主にそ

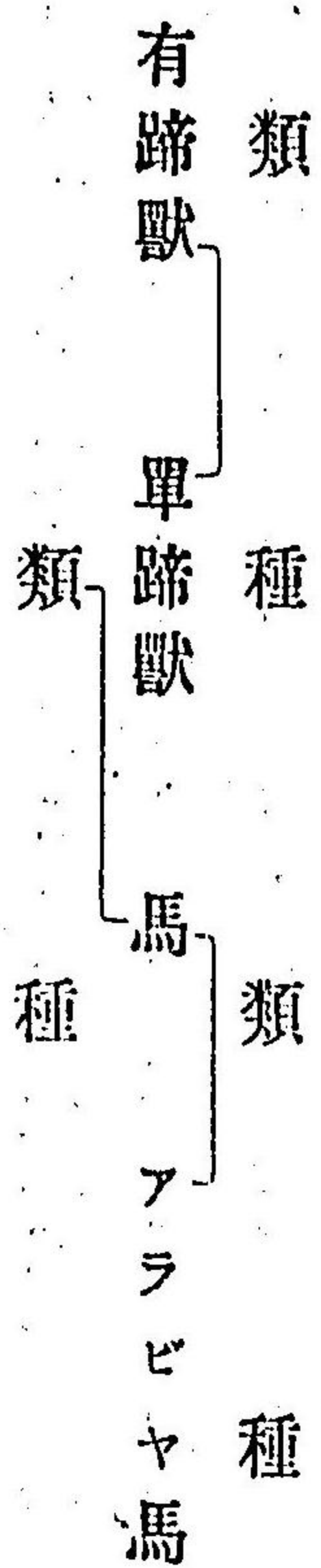
の呼吸法と、生殖法とによりて、獸類に計へ、俗人は、その黒色に重きを置きて、白色の鳥を否認し、科學上にては、必ずしも然らざるの差を生ず。要するに科學的概念は、完全なる概念にして、又完全なる分類法なり。

一事物が、その盛衰變化・境遇等に拘らずして、常に一事物と認めらるゝは、その個體の各場合に於ける認識を總合し、その不可變的にして常に同一なる點を抽象し、可變的の部分を捨象して、「この事物はかくくのもの」と認むるものなれば、その間、頗る概括作用と相似たる點あり。この故に、個體概念を個體概念と稱することあり。

三、**概念の大小** 馬といふ概念は單蹄獸といふ概念より小さく、單蹄獸は有蹄獸より小さく、有蹄獸は反芻獸より小さく、

く、生物は有形物より小さく、有形物は萬有又は實在といふものより小さし。この小さしといふはその概念に屬する類物の多少を意味するものにして、之を外延の大小といふ。外延大となるに従て、その抽象概念の数は減少す。之を内包の増減といふ。萬有又は實在といふものゝ如きに至りては、唯「存在す」といふ一點の同一なるによりて一團に結合せらるゝものなり。

或概念を一段大なる概念に比べて種といひ、小なる概念に比べて類といふ。左の如し。



四、概念と抽象觀念 概念も亦一種の抽象觀念にして、之に

恰當する個體は存在せざるなり。例へば、馬といふ概念にはその毛色又は體重に定限なきなり。然るに個々の馬には定まれる毛色・體重あらざるものなし。「白馬馬に非ず」とはこの間の理義を分析したるものなり。されども、概念は固より前に述べたる抽象觀念にはあらず。例へば、白・黒・重さ・高さ・丈・速さの如き觀念は、前に述べたる抽象觀念にして、白き物・黒き物・丈長きもの・速きものゝ如きは概念なり。即ち概念とは一個若しくは二個以上の抽象觀念を内包として、この屬性を所有する類物を一團物と見るものなり。故に、重さ・速さなどいふ觀念には物體を思ひ出さゞれども、重きものといへば、直ちに石・金等を意識に浮ぶるなり。

五、概念の種類 一抽象概念を内包として一概念を構成する事を得るが故に、概念には種々雑多の種類あり。即ち前にいへる動物・植物・礦物のあらゆる屬性を抽象概括して作れるものは完全概念にして、博物學といふものは殆んど全く之をその事業とするものなれども、その外たとへば天然物・人造物の人間に對する効用に就て、害虫・毒草さては家具・文房具・贅澤品の概念を作り得べく、又人造物の産地又は時代によりて、東山時代物・備前物等の概念を作り得べきが如し。又物の動作に就ても概念を作り得べし。例へば、蒸氣又は瓦斯の移動は皆之を「風」といひ、水の如き液體の移動は皆之を「流水」といひ、又人間の行爲の或條件を具へたるものを「孝」といひ、「慈善」といふ類是なり。されば、凡そ物體たると、

その形質・動作たるとに論なく、辭書にある所のすべての普通名詞は皆概念なりと知るべし。

單なる知覺は外形を知り、關係の認識はその内容を知り、概念は更に、その他の物との區別點を明にす。換言すれば、概念なきときは、個々の概念はあれども、一般的の類異類の思想なく、隨て物に關する一般的眞理の思考に適せず。されども、眞實なる直觀なき概念は恰も畫ける餅の如く、カントの「概念なき直觀は盲目にして、直觀なき概念は空虚なり」といへるは眞に然る事とす。

一感覺の觀念、及現象の觀念は、その之を發現する物體の何たるに拘らず、又その大小存在の場所等に關係なきこと、頗る個體概念に似たり。故に又概念と稱する事あり。

- 一、試に學問といふ概念の外延内包を示せ。
- 二、試に犬と獅と狐との内包を擧げてその異同を明瞭にし、且内包の數を算せよ。
- 三、事物の定義といふものは、概念及其の内包外延といかなる關係あるか、例解せよ。
- 四、觀念抽象觀念關係觀念概念の例をあげ、又その區別を説明せよ。

第七節 原則

一、原則 觀念と觀念との關係の認識を思想といふ事は、前既に之を述べたり。思想のうち余は是より讀書せんとす「余は昨日某氏の新著を買ひたり」の如きは、單に一個の事實にして常に然る事にあらず。「又此犬は黒し」これは石なりの如きは、そのものに於て常に然ることなれども、他のもの

にわたりて一般に然る事に非ず。然るに「猫は虎と同類なり」「鳥は卵生なり」などは、數多の個體にわたりて一般に常に眞實なるものなり。かくの如きを原則といひ、場合によりて又原理・眞理・理法などと稱す。

二、原則の第一種 は、概念に就てその外延の關係若しくは内包の關係を思考するにあり。例へば「梅は木なり」「猩々は四手類なり」といふが如きは、大概概念とその中に含まるゝ小概念との外延的關係を思考せるものにして、「梅は五瓣の花を開く」「猩々は前腕に逆生せる毛を有す」などは、梅又は猩々といふ概念とその内包とを思考せるものなり。

三、原則の第二種 は、すべての物體に通じて眞實なる思想なり。例へば「物體は相引く」「一と二とは三なり」「物體の墜落

は加速動なり、杯の如し。かくの如き思想は、概念とその屬性とを思考するによりて得らるゝものに非ず。何となれば、概念の内包は、通常その一類となる所以、隨て又他類と區別すべき所以、の特徴を擧ぐるのみにして、かくの如き現象を悉く含有するものにあらざればなり。この思想は、最初、物體とその現象とを認識して、一物體に就てその然る事を認め、更に他の物體に就て、又その然る事を観察し若しくは實驗して、その經驗内には、一物として之に反するもの無き事を思考するによりて、始て得るなり。是れいはゆる歸納法の一なり。

四原則の第三種 は因果の思想なり。因果とは、二個の事件が必然に相繼起し、Aあれば必ずBあるが如き關係をい

ふ。例へば、雨は空中の水蒸氣の熱を失ふ事に原因し、熟睡は身心の元氣(活動)の恢復を結果するが如し。然るに、水蒸氣が空中に於て熱を失ふには、或は高山に觸るゝとか、又は餘りに高く上昇せるとかの原因あり。又雨は地上の水量を増し、或は河川を漲らし、或は草木の發育を助くる等の結果を呈す。されば原因には近因、遠因あり、結果にもまた近果、遠果ありて、窮る所無きものなり。原因結果は、常に物體の現象にして、物體そのものを指すに非ず。物體そのものをば之を原因物、結果物といふ。例へば、水蒸氣若しくは雲は雨の原因物なり。されども、その熱を失ふといふ現象なきときは、雨となりて地上に下らざるが如し。俗人は、この原因と原因物、若しくは結果と結果物

とを混じ、種子を以て草木の原因となし、草木を以て種子の結果となす類往々あり。随て、そのいはゆる原因・結果は必ずしも繼起せざるものとなる。因果の思想の因りて起る次第は、原因物の原因的現象を認めたるにつゞきて、結果物の結果的現象を認め、更にその兩個の思想を會合して、その繼起の關係を認識するによる。されども、現象の繼起は悉く因果の關係によると認めらるる事なし。例へば、一日恰も午後三時の時計が打ちたると同時に、大雷雨驟に至りたる事ありとも、この二現象の間に因果の關係ありと認むことなきが如し。通常、人が二現象の間に因果の關係を認むるは、その兩現象が必ず常に相伴ひ、一方を缺きて一方のみ存在することなきを経験するに

よる。

科學的の思考に於ては、その原因現象より結果現象に至る次第を一層精密に觀察し、その原因物・結果物の屬性に就ては、更に他の場合に於て之を試験し、且つ人爲を以て、その原因現象より、果して常に結果現象に至るか否かを實驗するを要す。

因果の思考に於て紛らはしき事情數多あり。その一は、晝と夜との如きものにして、二者必ず繼起すと雖も、その間に毫も因果の關係なく、唯二者が同一原因より起り來たる同等の結果に過ぎざる類なり。その二は、身體諸機關の作用を休止するを以て死の原因と誤認する類にして、その實は同一現象の異名たるに過ぎざるものなり。その三は、原因

的現象ありと雖も、その度合によりて結果を現出せざる事にして、例へば水蒸氣が放熱して雲となれど、必ずしも雨となりて降り來らざる類なり。その四は、原因的現象、必要な度合に強く實現すと雖も、その結果に至るまでに他の現象に妨げらるゝ事にして、例へば毒物を食すと雖も、解毒劑によりて大事に至らざる類なり。その五は、一結果の現出せん爲には、二個以上の原因的現象の共動を要することにして、例へば豊饒を結果せん爲には、苗の健全と、肥料の適當と、水の供給と、適當なる光熱空氣の供給とを必要とし、その中の一を缺くも、完全なる結果を呈出せざる類なり。その六は、同一なる結果を呈する原因は一種に限らざる事にして、例へば、毒藥も傷害も、微菌も老衰も共に同一なる身體機

關の休止を引起す類なり。これらの錯雜なる事情の下に、於て、確實なる因果の思想を捕へ得べき形式を論ずるものは歸納論理學なり。

五、原則一般の形式 原則は常に或一類以上のものに普通にして、又過去現在未來に通じて眞實なるものなり。されども、その原則を構成するために、類物の數を盡して觀察又は實驗し、若しくは過去未來を窮極して觀察・實驗する必要もなく、且つ全く不可能の事に屬す。例へば人は遂に死すべしといふを以て原則とすと雖も、あらゆる世界の人に就て觀察せるに非ず、又固より未來に就て觀察し得るもの非ず。然るに之を原則と思考して疑はざるは、一は吾人の見聞内に於て、幾百餘歳を超えて長壽せしもの確に存在せ

ざると、又一には、他の生物全體に通じて、同様なる原則の是認せらるゝとによるなり。これらの事情によりて、歸納法は蓋然法・類例法又は枚擧法と稱せらる。或は、蓋然法・類例法・枚擧法を以て極て不完全なる原則構成法となすものあれども、如何に科學的なる歸納法と雖も、その實はやゝ完全に近い蓋然法・類例法・枚擧法たるに過ぎざるなり。上述三種の原則のうち、概念の原則は博物學の大部を占め、理法の原則・因果の原則は物理學・化學の大部を占むるものにして、他のすべての科學もみなこれらの原則の構成と、その應用とを事業とするものなり。關係の認識・關係觀念の覺知・概念の構成・原則の構成は、感覺・知覺を結合して作爲するものなれば、思考作用の一部にし

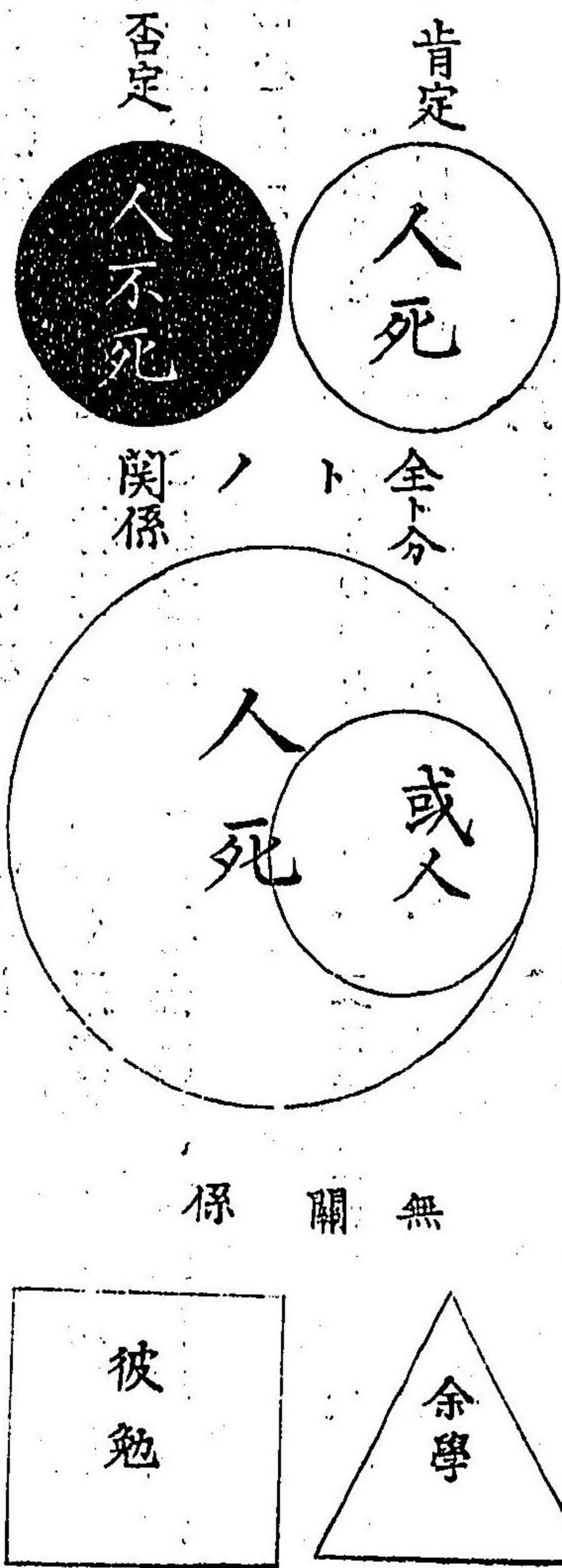
て、思辨作用と總稱せらるゝものなり。原則もまた復現の材料となり、全く思考作用を用ひずして意識に浮び來ることを得。この場合に於ては、尙ほ觀念と稱せらる。

- 一、知ると思考するとの別を明にせよ。又二者の關係を言へ。
- 二、因果の思想を表はせる命題を作れ。

第八節 推理

一、直接推理 「人は遂に死すべし」といふが如き、一般の眞理を表明せる一命題あらんに、これに就て種々に思考をなすことを得べし。例へば、「人は遂に死すべし」といふを眞實なりとするに於ては、「人は遂に死せじ」といふ事の眞實ならざる事を考へ、又「或人は遂に死すべし」といふ事の眞實を失は

ずと雖も、不充實なる表明たるを知る類なり。一個の事實を表明せる命題例へば「余は昨日曲馬を見たり」に就ても、之を眞なりとする以上は「余は昨日曲馬を見ざりき」の眞ならざるを思ひ、又「余は一昨日曲馬を見たり」の眞不眞知るべからざるを考ふるなり。此の如きを直接推理といふ。直接



らざるを考ふるなり。此の如きを直接推理といふ。直接推理は、一命題に就て、その肯定否定の關係、全と分との關係、及その命題は他の命題にあらざる事を思考するものにして、之を圖解すれば右の如し。

二、三段推理 命題の眞不眞は、前節述ぶる所の思辨作用の查察する所にして、推理は、その眞實とせらるゝ命題に就て、思考するものなり。三段推理は、例へば「勉強は幸福の基なり」といふ命題を眞なりとし、「彼は勉強す」といふ命題にもまた誤なしとせば、之よりして「彼は遂に幸福なるべし」と推斷する類なり。彼は未だ現に幸福なる事實を有せずと雖も、前二個の命題より思考して、未然に之を推知するなり。二個の命題より一個の命題を生み出し、その形三個命題の並

列を見るが故に、三段といふ、直接推理といふにむかへて間接推理ともいふ。又この種類の思考に於ては、常に或一個の命題を大原理とし、之に他の命題を引當て、その一致・反對を定め、以て一新命題を得るものなれば、之を演繹法ともいふ。演繹とは敷演し、尋繹する意なり。

三段推理は、詳密に分解すれば、皆右の如く三個命題の並列を見ると、雖も、世俗には、多く二段一連の形を以て通用せらる。然る時は、其の大原理を無言の中に含蓄せしむるなり。例へば、「彼は勉強家なれば、遂に幸福を得る事必せり」「我心石に非ず、轉ずべからず」などの如し。即ち「勉強家は必ず幸福を得」「石に非ざるものは轉ずべからざるものなり」といふ大原理より演繹しながら、而も之を表明せざるなり。

右に反し、三段の推理式を數多結合して一連となしたるものあり。例へば「甲は乙に等しく、乙は丙に等しく、丙は丁に等し。故に甲は丁に等し」などの如し。これらの推理の形式に關し、詳密に考究せるものを演繹論理學といふ。

三、思考作用一般の形式 前に述べたるが如く、原則の思辨は、個々の事實を基礎として、「時」の上「場處」の上に於て、一般に眞實とすべき思想を形成し、推理はその思想を基礎として、更に他の思想を造出す。換言すれば、思辨は一般の眞理を悟る法にして、推理は之を運用するものなり。即ち推理は二個の既知原則よりして、第三の新原則を造り出すものなれば、又之を一種の原則構成法と見る事を得べく、且つ既に述べたるが如く、原則は畢竟や、完全なる蓋然法によりて

構成せられたるものなれば、之が運用たる推理作用によりて始めてその眞否を證明せらるゝ關係あるものなり。故に推理は單に原則の運用たるに止まらずして、少からず原則の構成に關係あるものと知るべし。

一、火の無き所に烟たらず、今こゝに火ありの二命題より如何なる推理をなし得るか。

二、石炭は燃ゆべき礦物なり、この礦物は燃えず、故に石炭にあらずと同様に、人は言語を有すべきものなり、この啞者は無言なり、故にこの人は人に非ざるといふを得べきか。或は二者ともに誤れるか。

三、今日雨ふらば明日は晴天なるべし、明日晴天ならば明後日は雨ふるべし、今日雨ふれり故に明後日また雨ふるべし、之を二個の三段推理式に分解せよ。

第九節 想像

一、想像 觀念がそのままに意識に復現するは記憶にして、諸觀念の各部を取合せて現出するは想像なり。例へば、記憶にては、鳥は常に黒色にして、白鷺は常に白色なれども、之を我心中にて取合せて、白き鳥、黒き鷺を自由に想像し得るが如し。されば想像はその全體としては一新心象に屬すと雖も、その各部分は皆舊觀念なり。従て又、想像を以て感覺を造出すること能はず。想像は皆知覺以上の心象なりとす。

二、想像の種類 記憶が全くその過去の心象を變ぜず復現するは却て稀にして、多くはその重要ならざる諸點を變形してあらはる。是れ既に一種の想像といふべきものなれ

ども、普通にいふ所の他の想像と異なる點は、自らその變形したるを意識せず、全くの記憶と信ずる點にあり。普通にいふ所の想像に左の四種あり。

妄想 多くは、心意作用に異状を呈したる場合、若しくは睡眠中半醒の時に起る。或は多少實際の感覺を混構する事あれども、通常過去の觀念雜然として復現し、之に統一せる目的なく、又この作用を起さんとの意志なく、その心意作用に異状を呈せること、及半醒半睡の状態にあることも亦自ら識らざるなり。夢は即ち妄想にして、肉體の慾、所有の慾、若しくは喜怒哀怖等の情緒に關するもの多し。

空想 とは、之を現實に照せば、決して有り得べからざる事項の想像なり。されども、空想は妄想と異にして、之をなす

に意志あり、統一的目的ありて、思考作用を必要とし、又之を空想として見る所の一層覺醒せる意識あるを常とす。童話・寓言・西遊記の如き小説など皆空想を主とす。人若し空想を起して全く其空想中の人となるときは、之を迷想といふ。迷想が妄想と異なる點は、その尙ほ統一的目的あり、又之をなす意志ある點なり。

大古若しくは個人の生前・未來若しくは個人の死後、若しくは月宮蓬萊等、その果して然りや否やを驗證する能はざる想像は皆空想なり。されども、この種の空想は、その空想たることも亦驗證し難きものたるが故に、人は之を有り得べき想像となすことあり。この種の空想は、妄想・迷想と共に幼稚なる宗教心又は迷信の本源たる事多し。

構成想像 想像をなすに、意志あり、目的ありて、その目的に適合する事實を求め、若しくは在る所の事實に基いて、他の新事實を構想するを構成想像といふ。故に、大に、思考作用を必要とし、その適否によりてその価値の高下をなす。構成想像は、その用途の異なるによりて、實行的、理解的、娛樂的の三種に別たる。實行的とは、商人が物價の昇降を豫想し、及之に應ずる商略を計畫する事、農夫が天候の如何を察知して栽培の計畫を定むる事、參謀將校が敵軍の謀計を推察し、及之に應ずる計略に就て苦心經營する類にして、いづれもその想像を實行せんことを期するものなり。この種の想像にありては、常に「利を得る」目的と「害を避くる」制限とを有し、人はその條件に適合すべき各種の想像を逞しくし、そ

の中に就て最も勝れたるものを撰ぶなり。理解的想像とは、他人の言辭・文章によりてその事實を領得せんが爲めに、嘗て得たる經驗を結合構成するもの、若しくは或事實のよりて起る原由を説明せん爲に、假に或事實を構成する類をいふ。娛樂的とは、美情・同情若しくは敬虔の情等を満足せしむる爲に構成するものにして、小説若しくは美術の内容に關するものなど是なり。

理想 事物の完全に關する構成想像を理想といふ。他人より見れば完全ならぬ事實にても、その人に於て極て完全とせらるゝものは亦之を理想といふ。この第二の場合に於ては、理想の實體は現實に存在し、その大部はその事物の記憶に過ぎずして、聊か之に實際ならざる各種善美の點を

想像附加せるのみなるを常とす。故に、その實際を知るに従うて、その理想とする所のもの漸く一層完全なるものに移りゆくものなり。

三、想像一般の形式 想像の材料はすべて経験の範囲を出でず。従て、想像の各部分はすべて是れ舊觀念に外ならずと雖も、その結合法は全く自由なるが故に、結合したる全體としては全く新なる心意の産物たる事を得べし。故に、想像を創造性作用ともいふ。

想像作用の結果はまた想像と名づけられ、記憶の材料としては同じく觀念と稱せらる。

構成想像は、現實の事實に基いて現實の事實を造出するものなれば、大に心象を富贍にする効用あり。地理・歴史など

を學びて知識を富贍にするは、多くはこの心意作用の興りて力ある所なり。小兒に對する童話・寓言、大人に對する小説の有益なる點も、多くはこゝにあり。

想像は、若しその空想中の人となることを避け得ば、心象を富贍にする外、美術心を高め、實際上に於ては、事態を豫想し、之に應ずる計畫をなし、學問上に於ては、發明・發見の補助となり、尙ほ理想によりて人の品性を向上せしむるものなれば、教育上に於ては適當に之が發達を謀るべきものなり。

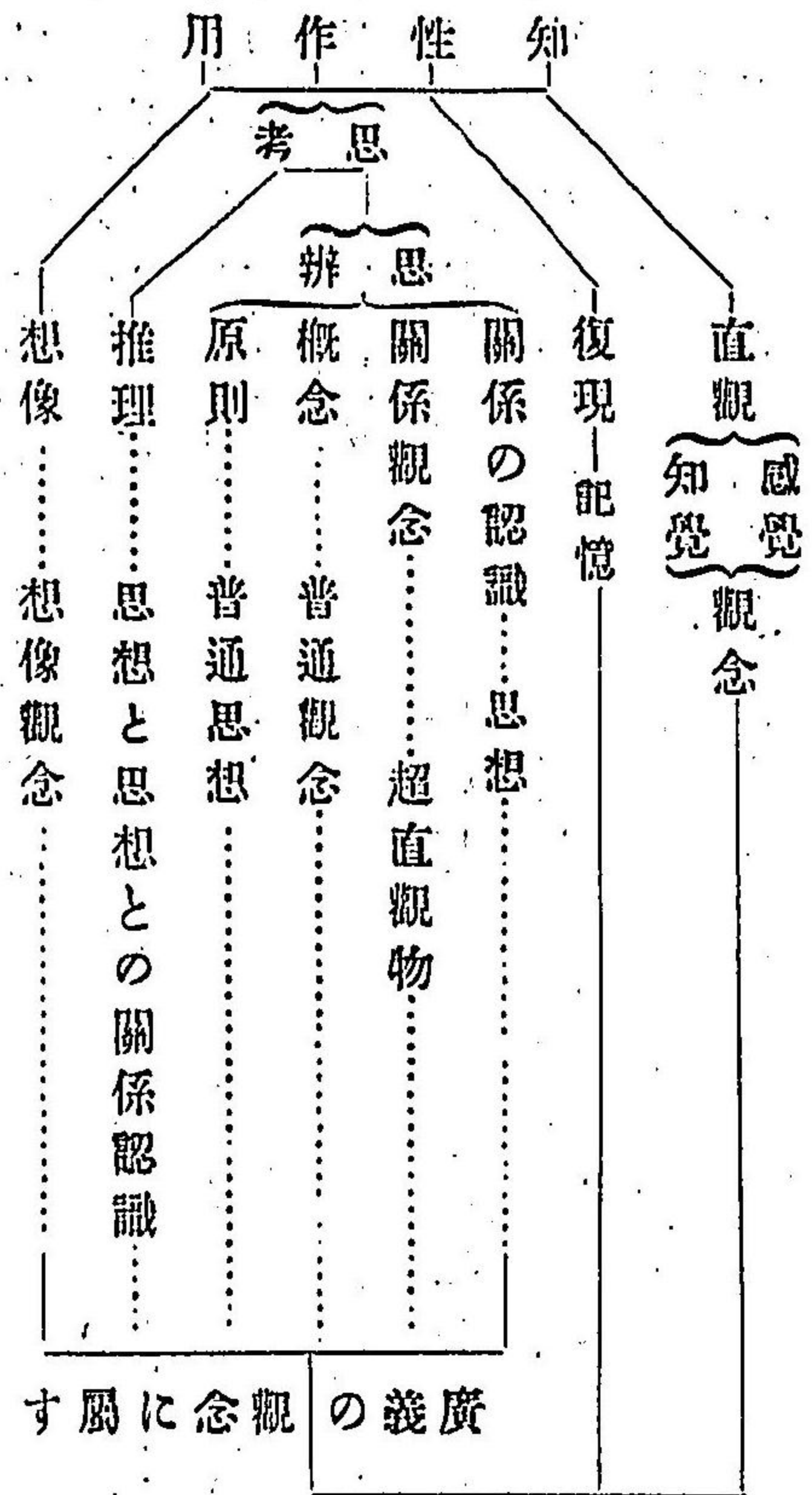
一、小説の利害、若し利ありとせば其讀み方如何。

二、眞に想像も及ばざる事物ありや如何。

三、想像に思考の必要なることを例證せよ。

第十節 知性作用概説

一、前諸節に述べたる諸種の知性作用を表示すれば左の如し。



或は思考作用の全般を指して悟性作用といひ、その中、特に神一元最大原理に關する觀念思想を理性作用といふもの

あれども、本書は採らず。

二、直覺 善・惡・美・醜の類は、之を一見すれば、その何故といふことを思はずして、直にその然ることを認知し得るものなれば、恰も直観に於て黒・白・長・短を直に覺知するに準らへて之を直覺作用と稱すべしといふ説あり。蓋し、美・醜等の感情は、すべて、その何故といふことを思はざるものなれども、善・惡は思考若しくは過去の思考の記憶、或は他人より傳聞せし事の記憶によりて認知するものなり。故に幼童に於ては惡と認めざりしものも、漸く成長するに従て直に惡と認むるに至る。されば、知性作用中に特に直覺作用なるものゝ存在を認め難しとす。

三、知識の種類 觀念思想を總稱して知識といふ。知識に

は先づ二様の種類あり。一は知性作用上の種類にして、一はその材料上の種類なり。作用上の種類とは、或人は多くの事物に就て博識なれども、思考すること拙く、或人は思考すること得意なれども、博く事物を記せずといふ類なり。教育上にてこの部面の完全を謀るを形式的目的といふ。材料上の種類とは、或者は物理・化学の知識に富み、或者は心理・倫理の知識に富む類にして、教育上之が完全を謀るを實質的目的といふ。蓋し、普通教育に於ては、各種の材料を以て各種の知性作用を發達せしめんとするものなり。

四、知識と言語と 知識は外物の寫象及其の關係の認識に外ならずして、言語はその寫象・認識の符號なり。言語なければ知識を他人に發表する能はざるのみならず、之を明瞭に

心中に保存すること殆ど難し。言語と觀念思想とはかく親密なる關係あるが故に、時としては言語は直に外物の模型と見做され、恰も圖畫・彫刻と同様に、之を知るを以てその事物を知れりと誤らるゝことあり。兒童はその生活に極めて親密なるものゝ外は、唯その言語を聞知るのみにて、その實物を見たる事なく、従てその思想・觀念は殆ど空虚なる事往々あり。之を内容なき言語若しくは意義なき言語といふ。初步の教育に於ては、兒童の空虚なる言語を充實し、若しくは誤れる内容を規正するを以てその務となすべきものなるに、不注意なる教師は、或は素讀・誦の類により、或は鸚鵡的問答を課する事によりて、却て空虚なる言語を増加することあり。

言語と心意との關係は、感情・意志に於ても之と同様なり。
五、知的心生活の模様 一般の心生活中より、知性作用を抽出して、假に知的心生活と名づく。知的心生活には種々の模様あり。例へば、感覺においては、一般人よりも、微弱なる刺激を感受することを得、從て知覺精密に、記憶も亦些細なる點の連合によりて、伴生復現し、思考に於ても一見直にその關係を認識するが如きは之を、**穎敏**と稱する類なり。利害の計算に於て、**穎敏**なるは、**伶俐**にして、**穎敏**に、一層確實周到・深遠の度を加へたるものは、**聰明**なり。その他、**縝密**といひ、**周到**といひ、**機智**といふも、皆この類の或事態をいへるものにして、**遲鈍**・**蒙昧**・**淺薄**等は之が反對の模様をいへるものなり。而して或事物に就て、**穎敏**・**聰明**・**機智**・**縝密**の類を並べ

備へ、殆ど人間の群に超絶せる度合に在るものを以て、その事物に就ての**天才**といふ。これら知的生活の模様は、多くは遺傳體質に特存し、學びて容易に得がたきものなり。
 冷靜又は思慮分別ありと稱するは、多くは感情又は慾望に制せられずして、周到に知的心生活を繼續する事なり。少年・青年は、自己の知識に誇らんとする感情に制せられて、往々却てこの必要なる冷靜・思慮を失ふものなり。
 思慮・分別等の知性作用の活動によりてよく事理の歸着する所を見るを**識見**又は**知見**といふ。

一、如何なる知識が人物を高め、如何なる知識が日常の生活に必要なるか。

二、神童といふものを心理的に解剖せよ。

第三章 意志

第一節 意志の初發

一、意志 人生れて直に何事を爲すかを見るに、呱呱と泣き手足を蠢動す。此時未だ何等の識以上の心生活あるを認むべからず。されども、之に乳を嘔し、抱いて之に人體の溫を接すれば、泣かず動かずして怡々如たり。即ち識以上の心生活なしと雖も、識以下の心生活あり、換言すれば、意志の萌芽ありて欲求し、感情の萌芽ありて快不快を感じ、感覺の萌芽ありてその哺乳抱擁を知るなり。此状態にある意志感情の萌芽を衝動といひ、その衝動より起る呱呱蠢動若しくは乳頭の口中に觸れたるを感知して之を吸ひ、之を嚥下する等の知的動作を本能といふ。

衝動と本能とは、自然が人及び他の動物に賦與したる自然的活動にして、若し之無からんか、即ち生活なきなり。就中、衝動を以て生活の根本となすべし。何となれば、衝動は呱呱蠢動その他の知的動作を起す所以の本源なればなり。この衝動漸く發達して意識ある體慾體感となり、本能發達して智識技能となる。されば、心意は知情意三作用の統一體にして、いづれが主、いづれが従といふことなしと雖も、意志感情は心的活動の根本たるものにして、主觀中の主觀部なりといふを得べし。衝動・本能の時代に於ては、人と人との差異・優劣殆ど認むべからず。若し強ひていはゞ、唯その活力に強弱ありといふを得べきのみなるが、漸く發達するに従て、各人の稟賦漸々

現はれ来る。中にも知性作用の發達の如何は、大に情意の發達に影響し、よりて各人の差異をして頗る著大ならしむるものなり。

一、衝物とは如何。本能とは如何。

二、動物のうち頗る特異なる本能を有するものは何ぞ。

第二節 意志の種類

一、衝動的意志 意識ある意志に三種の別あり。衝動的意志・願望意志・行爲意志是なり。衝動的意志とは、全く無意識なる衝動の漸く意識せらるゝものにして、一般的なる榮養の慾、活動・休息の慾是なり。合せて體慾ともいふ。兒童の要求は即ち兒童の意志の發表にして、その多くは「たべたい」「遊びたい」「見たい」「寝たい」等なるによりて知るべし。この體

慾の下底には、快適なる生存を欲するの意志潜在するものにして、やゝ成長の後に於ては、これ亦意識に上ほり来る。遙に後に起る生殖の慾も、亦この無意識なる生存の慾と相關聯せるものにして、衝動的意志の一なり。衝動的意志は、凡て全く内部より自然に發生するものにして、感情・知性作用の前に存するを特徴とし、人によりて強弱・厚薄はあれども、賢愚によりて殆ど差異なきものとす。

二、願望意志 知情漸く發達するときには、衝動的意志は漸く一定の目的物を定め、之を得んとするに至る。願望意志是なり。例へば、兒童は榮養の慾あり、之が満足を得ざるに於て不快を感じ、呱呱と泣いてその意志を發表す。是れ衝動的若しくは衝動的意志と本能となり。然るに若し常にミル

クによりて之が満足を得る時は、やがてミルクを得んとする意志を生ずべし。是れ即ち願望の一種なり。願望の種類は固より雑多にして枚擧に遑あらずと雖も、その最初にあらはるゝものは、榮養物及感官に適當なる活動・休息を興ふる物件に對し、之に執著し、所有し、保護せんとする意志にして、總じて之を**所有の願望**といふ。但しそのうちには、之に反するものを避け、放棄し、若しくは破却せんとする意志をも含ませたり。ついで起るものは**社交の願望**なり。社交は、身體并に心意作用に對して最も恰適なる活動・休息を興ふるものなるを以て、人は必ず友を求む。されば**社交の願望**は、人間に對する**所有の願望**と見る事をも得べし。社交の願望といふうちには、亦ある友を斥くる意志をも含ま

せたり。所有の願望・社交の願望より、更に第二次的に生じ來る願望に**權力の願望**・**名譽の願望**あり。所有・社交の願望を實施するに當り、體力・知力あるに非ずば、容易にその目的を達すること能はざるを經驗する時は、人は先づこれらを得て、以て自由に物を得、人を制せん事を意志す、是れ即ち**權力の願望**なり。之に反し、所有・社交の願望を實施するに當り、名譽が最もよくその目的を達する事を經驗する時は、人は専ら之を得んことを願望するに至る、**名譽の願望**是なり。而して或は**體力・知力**を以て名譽を得るの方便とする事あり、又名譽を得て以て**社交上權力**ある地位を得んとする事あり。所有・社交の願望より**第三次的**に生じ來る願望は、**理を究め、藝を磨かんとする願望**、**善を行はんとする願望**、**美に**

依らんとする願望なり。權力の願望に於ては、唯、體力・知力を得て以て自由に物を得、人を制せんとするにあれども、一歩進めば、その體力・知力は一に理を究め藝をみかくに非ざれば得べからざるを知り、遂にはその由りて起りたる所有、社交・權力の願望を離れて、偏に理を究め藝を磨かん事を是れ願ふに至る。理を究め藝を磨かんとする願望是なり。名譽は、善を遂ぐるによりて初て完全に得らるゝものなる事を悟る時は、人は名譽を得んとする願望を一步進めて、善を成し悪を爲さざらん事を努むるに至る。又或は同心一體、利害共通なることを認むる範圍内のものに對しては、恰も己を快適に保存せんとすると同様に、他を愛護し、顧念し、よりて善をなさんとすべく、又或は、自他永遠の幸福は唯善

にある事を知るによりて、善をなさんと願望するに至る事もあるべし。是れ即ち他に對して善を行はんとする願望なり。人は他人の言語・顔色・服裝・舉動又は室内裝飾等の如何によりて、或は快感を起し、或は不快感を起す、是れ美情なり。人は他の美を欲すると同時に、又我言語・顔色・服裝・舉動等に注意して、人をして美情を起さしめ、少くとも醜惡の情を起さざらしめんとする願望を有す。これら、眞善美に對する願望・意志は、或は情操と稱せられ、又は良知と名けらる。良知は眞善美に對する知情・意の一致にして、この意志の生ぜんためには、先づ眞善美の何たるを知り、之に就て愉快の感をおこさざるべからず。

三、行爲意志 行爲意志とは衝動的意志・願望意志を實行す

る意志にして、一に執意ともいふ。例へば、某處に行かんとして絶えず兩脚の筋肉を動かすが如き、若しくは絶えず口舌の筋肉をはたらかせて對話をなすが如き、すべて活動を起し之を繼續する所の意志なり。活動とは腦の運動につづく筋肉の運動にして、その極最初に發現するものは本能なり。意識ある心生活の起るに及びては、本能の大部は意志の支配に屬する活動となり、他の一部は不隨意若しくは無意識の運動として存留す。

意志を以てする活動を行爲といふ。行爲は意志によりて起され、繼續せらるゝ活動にして、固より意識あれば、之を起すと起さざると、之を中止すると繼續するとは、皆己に由る。通常、行爲といふは、意志を以てする筋肉活動即ち言語・動作

を意味すと雖も、正しくは意志より起る腦活動即ちいはゆる故意の注意、不注意をも含むべきものにて、道德上において、爲すべき動作をなさざると、なすべき注意をなさざるとは、等しく共に斥くべき事に屬す。

一、體慾と願望意志との區別及關係をのべよ。

二、願望意志の種類を擧げよ。

三、體慾及願望意志と行爲意志との關係を述べよ。

四、行爲及注意と行爲意志との關係を述べよ。

第三節 行爲意志

一、意志の共存及競合 衝動的意志及願望意志は、常に多数心内に潜在し、其内の二三若しくは四五時あつて同時に意識に上る。之を意志の共存といふ。例へば、渴を感じて之

を醫せんと欲するは體慾(衝動的意志)なり。之を醫せんが爲に水を得んとするは所有の願望なり。數歩にして冷泉あるを知れども、不耐の譏を思ひて之を掬ばざらんとするは名譽の願望なり。かくの如く、各種の意志心内に共存し、何れもその満足を得んとするを意志の競合といふ。競合に於て優勝の地位を占めたる意志は「したい」といふ願望の状態より、進みて「爲さん」といふ決意の状態となる。決意は即ち行爲意志の起點にして、之よりして腦又は筋肉を刺戟し、行爲を起し、之を繼續するものなり。

意志の競合に於て、そのいづれが勝を占むるかは、人により、事情により、千差萬別にして、固より定まれる事なし。故に何程心理學に精通すと雖も、到底、活人の意中を忖度して誤

なきを保する能はず。讀心術の如きも、此點に於て遂に無効たるを免れず。然れども、大體の形式に就ていふ時は、諸種の願望の中最も強力なるもの、若しくは最も他の意志と相抗拒せざるもの勝を占め、或は多少變更せられ、若しくは全く最初のまゝにして行爲意志となる。而して或一事に就ての決意は、必ず「爲」「不爲」のいづれかなり。

二、意志の自由 各種の願望、心内に競合して、結局その中の優勢なる者に一決したるときは、之を稱してその願望の自由といふ。例へば、單に賞を得んとする願望より或善行をなしたりとせば、是れその賞を得んとする願望の自由にして、善をなさんとの意志の自由に非ず、その行爲に現はれたる所は同一なりと雖も、道德的意志の自由より出でたる行

爲に非ざるものは、道德的價値を有せざるなり。倫理學にては、之を動機の善惡といふ。他人の威迫に遇ひ、之を避けんとする意志強くして、爲に善をなし惡をなさざらんとの意志を抑へ、よりて惡事をなしたる場合の如きは、是亦生存の慾の自由にして、道德的意志の自由に非ず。生存の慾は、常人にありては常に最も優勝のものなれば、倫理上に於ても、かかる場合を責むる事頗る輕し。然れども、最も貴むべきは、如何なる願望と競合すとも、道德的意志常に優勝を占め、その自由を以て行爲するにあり。

三、意志の強固 意志の強固といふは、一旦自由を得て決意に進行したる意志の、不變耐久の度に就ていふものにして、例へば、喫烟の有害無益なるを知りて之をやめんと決意す

れども、體慾に迫られて忽ち舊態に復する如きは、意志の不強固を示すものなり。貞操・節操・勇耐・剛毅・大膽等の諸徳は、多くは意志の強固によりて成就せらる。されども、事理の辨明を缺きたる意志の強固は、いはゆる頑冥固陋に陥るべし。倫理上にては、善を行はんとする意志獨り強盛にして常に自由を得、その決意は強固にして他の意志に左右せらるることなく、却て、他の意志の決意を容易く變更し、廢棄し得るを最上とす。されども、世俗にいはゆる「惡に強きものは善にも強し」の諺の如く、變更すべき決意を容易に變更する習慣は、變更すべからざる決意をも亦たやすく變更するに至る處無きに非ず。

一、薄志弱行の心理的解剖如何。

二、或悪事を單に願望したると、願望して決意したると、願望し決意し實行したると、その罪同一なりや、輕重ありや如何。

第四節 意志の商量

一、意志の商量 衝動的意志、願望意志は、皆その實現すべき事物を有す。之を目的といふ。この目的を達するには、知性作用によりて、その最初に行爲すべき事、次に實行すべき事等、順次に目的に近よるべき計畫を心中に畫かざるべからず。この計畫を手段又方法といひ、意志とその目的を達する手段とを合せて意見といふ。意見の實行に臨み、その實行がその目的の上に於て、將たその手段の上に於て、倫理上如何の價值を有するかを思考するを意志の商量といふ。意志の商量は、之を誠意、正義、好意等の觀念に照合して、その

合否を判するにあり。

誠意とは、或意志の爲にする或行爲を、他の意志の爲にするもの、如く粧はざるなり。例へば、人望を得んが爲に善をなす人にありて、内、自らその然るを認め、外人に對しても亦その實相を掩はざるは誠意なり。之に反し、眞實の動機は人望を得るにあれども、之を隠して、唯愛憐の爲にすと言ふは誠意ならざるなり。大學に、身を修めんとするものは先づその意を誠にすといへるが如く、誠意は實に進徳の基礎にして、誠意ならざるものは必ず偽善、陰險、奸邪の方向に傾くを免れず。誠意ある者は、たとひ多少の缺典ありとも、必ず人を感動せしめ、從て人の愛敬を受く。孔子が「剛毅、朴訥、仁に近し」といへるは、この間の消息を洩したるものにし

て、直情徑行といひ、天真爛漫といふも亦この類なり。誠意なるものは、その知識進み思慮加はるに従て、遂に完全の善に到達する望あれども、誠意ならざるものは、永久徳に進むの道に入る能はず。知識進み思慮加はるに従て、却て益々徳に遠ざかるべし。詐偽とは、すべてその認識に反して言行するものにして、不誠意は全くその一なり。

正義とは、個人の交際、又は團體とその團員との間に存する常規にして、法律又は習慣によりて許容せられたる權利、并に命令せられたる義務の類なり。權利は十分に之を主張することを得べく、義務は苟も之を果せば足れりと雖も、此の如きは唯惡に陥らざるまでにして、進んで善をなしたるものにあらず。故に之を消極的の善といひ、又反面の善

といふ。一步權利を踰え、若しくは一點義務を缺くときは、直に惡に陥るなり。正義の念は、之を分析すれば公平及報償の念なり。同等なる勞力を以て共同に得たる利益は、均一に分配すべしといふは、公平の念にして、また正義に合し、借りたるものは返すべしといふは、報償の念にして、同時に正義なり。正義の念を以て意志を商量するに方りては、常に正義に合せりや」と考量せずして、正義に反せずや」と考ふるを適當とす。

好意とは、他の幸福の願望なり。仁といひ、忠恕といふも同じ事にして、他人に對する同情愛情より起るものなり。即ち、他を不幸の境遇に置きて、獨り専ら幸福なる事能はざる感情より生ずるものにして、固より自己の幸福の願望と

相連關すと雖も、由來全く倫理的なる願望なり。好意の爲に、人は主張し得べき権利をも主張せず爲さざるを得べき行爲をも義務と定むる事あり。之を積極的の善又は正面の善といふ。かく、好意は他に對する愛情より自然に生ずるものなれども、苟も善を成さんとの願望を完くせん爲には、すべての行爲に就て好意を失はざらん事を謀らざるべからず。故に、正義を以て意志に商量を與ふると同時に、又好意を以て之を商量し、且つその行爲が果して他の幸福に適するか否かを考へざるべからず。

意志の商量は吾人が徳に進む所以の工夫にして、他人に就て之を施すときは訓練なり。意志の商量は、また、行爲の外觀に就て、他人の快感を損ずることなしや否やを顧る事あり。

り。之によりて、人は漸くその言語を令くし、舉動に禮讓を有するに至る。意志の商量は行爲の前に於てもし、又行爲の後に於てもす。後に於てするものは更に後なる意志に影響す。

一、動機善なるものは行爲もまた善なりや如何。

二、人は手段に就て責任なきものなりや如何。

三、動機の缺典と手段の缺典と道徳上いづれを重しとするか。

四、意見と知見、識見などいふものとの異同如何。

第五節 意志と知性作用

一、意志と知 衝動的意志は、知の前に存し、知の爲に動かさるゝことなしと雖も、願望意志は、知性及感情の發達如何によりて、漸く變更し來る。事物、特に人事に就て統一明瞭な

る思想を有するものは、必ず眞・善・美に對する願望を生ぜざるべからず。若し之を生ぜずとならば、その思想に不備・缺陷あることを示すものなり。更に反面より之を言はゞ、全く知識なき事物に就て願望を生ずること無きによりて之を知るべし。この點よりいふ時は、知は願望意志の由りて生ずる所なりといふべし。教育上に於て、知育は徳育に害ありといふは、その知識の種類に就て不備あるか、若しくは統一なく、明瞭ならざるによるものにして、無知にして有徳の君子となり得べきに非ざるなり。例へば、無知なるもの欺かざるは、欺く能はざるなり、不統一にして不明瞭なる知識を有するものは、欺くを得べく、而して欺くを以て利益と思ふべし、統一明瞭なる知識を有するものは、欺くことの

結局は決して自他の利益にあらざる事を知りて、曾て欺かず、又他人に欺かるゝ事無きが如し。行爲意志に對して、知識はその手段を提供す。意志目的ありと雖も、之を將來すべき手段に就て知識を缺くときは、行爲に出づる能はず。又その知識に缺陷あるときは、遂にその目的に到達する能はざるなり。又統一明瞭なる知識あるものは、些末なる障礙に遇うてその決意を翻す事なく、詳に事情を案じ、種々に手段をかへて遂にその目的を達することを得、よりて意志の強固を失はざるなり。意志の倫理的商量も、また倫理的知識なくして行はるべきものにあらず。

一、知識と意志との關係を詳しく述べよ。

二、政治學の博士、必ずしも大政治家たらざる理由を説明せよ。

第四章 感情

第一節 感情

一、感情 衝動は意志的になると同時に又感情的なり。即ちアミールバが日光の方に移動する如きを考ふるに、その日光に接して自體に感應ある事は疑ふべからず。而してその感應を歓迎する意志的素質は夙く中に存し、よりて本能を以て移動をなすものと思はる。この關係よりして、或心理學者は感情を以て心意の根本となし、他の心理學者は意志を以て心意の根本となす。然れども此は無意識の状態に就ていへるものなり。意識ある状態に就ていふ時は、感情は多くは知識につゞいて起るものにして、その原因は身體と心意との雙方に存し、

心意の側に於けるものは多くは意志に關係せり。例へば、始て魚油を嗅ぐものは、之を知ると同時に不快の感を生ずべしと雖も、嗅官之になる時は、之を知ると雖も、敢て不快の感而起さず、又名譽の願望無きものは、他人の罵詈に遇ふとも格別の感情を起さざるが如し。されば感情は、或状態に於ける身體・心意、特に意志の調子を示す一種の心意作用にして、その外物に對して起る場合には、必ず知性作用の先行あるものと知るべし。

第二節 感情の種類

一、感情の種類 感情の種類は大別して四種とすべし。身體の状態より起るものを體感といひ、外物が身體に及ぼす作用よりおこるものを五官の感又は感應と稱し、意志の状

態より起るものを情緒・情歎と稱し、心意の調和的活動について感ずるものを美的感情といふ。

二、體感 には、身體全部の過度なる運動又は休息によりて起る疲勞・醜屈の感あり。適度な運動・休息より起る快活の感あり、或は之を身體上の美感ともいふ。又繼續せる血液の缺乏又は不純より起る一般的不快の感、一時榮養の不足より起る飢渴の痛感等あり。此等は凡て身體の状態より起る物にして、上に述べたる體覺及氣分のよりて生ずる所なり。されば此種の感情は知性の前にありといふべし。

三、感應 感應は、外物が感官に及ぼす作用の如何によりて生ずるものにして、知性作用の感覺に伴ひて起るものとす。今左にその大畧を言はん。

視覚の色彩に就ていへば、通例、單一色彩は他の色彩の配合よりも快感薄く、特に赤色と青色、黄色と紫色との如き謂はゆる補色をなすものに於て快感特に大なり。光明に就ていへば、光明は常に愉快にして、暗黒は不愉快を感じ、白色と黒色とに於ても亦凡そ然り。故に光明ある色彩は光明薄き色彩よりも快感多く、單なる光明は色彩ある光明よりも快感少く、白色・黒色は他の色彩よりも快感薄し。光明ある各單一色彩より起る感應の模様を分析すれば、赤色は活動的にして、青色は寂靜的、黄色は充足的にして、綠色・紫色は慰安的なり。故に神經興奮せるときは赤色若しくは黄色に於て快感を催し、疲休せるときは紫色・綠色に就て快感を生ず。明暗・黒白に就ても、亦之と同様なる關係あり。

聽覺に就ていへば、音響は概して音響無きよりは快感を催し、従て大なる音響は小なる音響よりも快感多く、低音は高音より快感少し。而して、單一なる音響は各種音響の混合又は連續よりも快感薄く、單一にして斷續なきものは斷續あるものよりも快感薄し。單一なる音響に就ての感應の模様をいへば、大なる音響は赤色に似、小さき音響は青色に似たり。例へば雷鳴砲聲と蟲の唧々、泉の潺緩との如く、又は軍樂と通常音樂との如し。高き音響は急激的にして、低き音響は寛徐なり。されば神經の状態の如何によりて必ずしも一樣に快不快をいふべからざる事、視覺に於けると同様なり。觸覺に就ていへば、通常、柔軟なるもの滑澤あるものは快感

を起し、温覺にては温暖なるもの、若しくはやゝ熱きもの、又はやゝ冷なるもの快感を起す。味覺・嗅覺に就ては、總括して、その身體の榮養に適するものは快感を起すといふ外、分析して之をいふ事能はず。

五官の快感はすべて感官の適度なる活動に基き、不快感は之に反するものと見做さる。この故に、五官の活動緻密となるにつれて、漸く、複雑なる刺戟に於て快感を生ず。例へば、野蠻人は唯赤色・黄色の單純なる色彩を喜べども、文明人は尙ほ他の色彩を配合せるものを喜び、又、むしろ間色・薄色などを好むが如し。單音より漸く重音を好むに至るものがためなり。感官は、又、その常に受くる所の刺戟に順應して、その組織を變ずるが故に、最初不快を感ぜし物も漸く快

感を起す物となる。例へば、葷辛類の嗜好の漸く增長する類是なり。暗中より、急に強き光線の中に出でたるとき、一時不快の感を起すは、感官の調整に基く一時的現象なり。感官は又活動によりて漸く疲勞するが故に、最初快感を生じたるものに就ても更に快感を生ぜず、若しくは却て不快感を生ずるに至る。例へば、繪畫展覽會杯を觀て未だ半に至らざるにはやく既に快感を失ふ類是なり。これらのことは體感に就てもまた畧ほ同様にして、結局身體的快不快の感は、身體全部若しくはその機能の保存若しくは發達に適せりや否やによりて分るゝものと認めらる。而して、その快感より不快感に變じ、不快感より快感に移る間には、不快無感の場合あり。身體的快不快の感はかくの如き事

情の下にあるものなるが故に、各人によりて相違あり、又同一人と雖も、時と境遇とによりて必ずしも同じからず。故に外物について、此物は快感を起すもの、彼のものは不快感を起すものと永久に一定することは不可能なり。以上感官上の快感は、また之を感官上の美感ともいふ。

一 繪畫服裝などに於ける色の配合上の心得如何。

二 都人は山水を見て快感を生ずるに、海士山樵は格別その感なき理由を説明せよ。

四 情緒 快感の源たる事物を得んとするときには愉快の感生じ、不快感の源たる事物に遇はんとするときには不快の感起る。此は我にその快感を得んとする意志ありて、その意志の遂行せられんとするを知るより起るものなり。情緒

といふはこの類の感情にしてその種類甚だ多し。内に願望あれども之を遂行する方法を知らざるときは鬱悶の情あり。その願望愈々はげしくして、その方法いよいよ困難なるに際しては、人は失望の極、狂となり、或は悶死するに至る。願望もし秘密に屬し、他人に告げてその助力を借ること能はざる場合など、特に此状態に陥りやすし。願望あり、又之を遂行する方法あるときは、いはゆる希望の光明を望見して、心情平和を得、慰安の感あり。この際もし突然ある妨害を發見するときには、驚愕の情おこり、引續きて**畏懼不安**の情おこる。もしその妨害が他人の故意より出づるを知るときは、その人に對する**憎怨疾惡**若しくは**憤怒**の情おこり、若し之よりして或意志を生ずるときは、それに

よりて平和を得、慰安の感に復する事あり。
願望若し他の助力によりて容易に遂行せられんとするときは**歡喜**の情おこり、若しその助力が他人の故意より出づるを知るときは**感謝恩愛親和**の情おこる。
心内に於て各種の意志互に競合して一決せざるときは、謂はゆる**懊惱呻吟不安**等の情おこり、一定の意志久しく目的を達せざるときは**退屈疲倦**の情おこる。又今まで遂行を努めたる意志の**正義仁愛**に反したるものなる事を發見するときには**慚愧忸怩**の情おこり、之に反するときには**名譽自信自負自重**の感おこる。若し又或は**正義仁愛**等の理想に反せずやと考へて、たしかに判断をなさざるときは**卑下羞耻**の情起る。羞耻の情は、多少の畏懼と**慚愧**の情との合成せ

るものにして、**向上的願望**なきもの、有せざる所のものなり。又凡ての意志について容易に遂行を必期する場合には**傲慢**の情生ず。

人間の根本的願望たる生命を奪はんとする**猛虎毒蛇**の類に遇ふときは**恐怖**の情激しく、之が爲に一時氣絶し、若しくは長く恢復せざるまでに**神経の常態**を破壊する事あり。

- 一、怒は必ず悪徳なりや如何。
- 二、いはゆる**神経質**なる人は、情緒に於て如何の特徴を呈するか。
- 三、幼兒が**虎狼**の前にありて嬉笑し居たる例あり、その**恐怖**の情のよこらざる所以如何。

五、情款 情款は、他人の意志の窮通を以て我意志の窮通の如く感じ、その人の爲に悲しみ、その人の爲に喜ぶ同情及之

に反する反情にして、同情よりして、その人の意志に助力して感謝・恩愛の情を起さしめ、反情よりして、その人に妨害を興へて更に憎疾若しくは憤怒を招くは、世上一般にある所なり。而して、我に優りたる富貴・權勢若しくは知識・技能を有する人に對しての同情は、欽仰・崇拜となり、我に如かざるものに同情すれば、憐憫・慈悲となる。又我に優りたるものに對しての反情は、猜媚・嫉妬となり、劣りたるものに反情すれば、輕蔑・嘲笑の情となる。これら各種の同情・反情は、一概に快・不快をいふこと甚だ難きものなれども、概して同情は快感に屬し、反情は不快感に屬す。

同情の抜くべからざる根元は、父母がその子を愛するにあり。子はその父母の分身なれば、自己を愛護するものは必

ず子を愛護すべき自然の關係あり。故に如何に野蠻の民と雖も、否な禽獸と雖も、子を愛せざるはなし。聖人之を認めて以て人道の根基となし、推しひろめてすべての人に及ぼし、忠を成し、恕をなし、以て「萬物育焉」の狀況に至らしめんとせしは、誠にゆゑあり。而して、父子の基は夫婦兩性の愛にあり。是亦自然の關係にして、人力の遂によく避くる所にあらず。「聖人之道造端於夫婦」といへるはこれが爲なり。之に反して、反情には抜くべからざる根元一もある事なし。道德上、同情の貴重なること、又その根本的基礎ありて、之を破壊するに足るもの一も存在せざること知るべし。

父母の子女に對する同情は、子女の父母に對する同情を引起すものにして、いはゆる「愛は相對に成立するものなり」。

邪慳なる繼父母に對して、繼子女が孝養を盡すが如きは、恐らくは、義理・外聞の思想よりなすものにして、衷心自然の感情より出づるにはあらず。

一、人の親切を喜ぶ情と同情との別及その關係をいへ。

二、知己の訃音に對しておこる感情を心理的に分解せよ。

六、美的感情 美的感情は、身體若しくは心意の調和的活動について感ずるものにして、意志の状態に基く情緒・情歎とは別物なり。例へば美麗なる繪畫を見、若しくは高尚なる音樂を聞きて感ずる愉快は、謂はゆる感官上の美感にして、その根元は感官の調和的活動にあり。又演劇を見て快感を生ずる場合には、舞臺の後景、役者の服裝・聲音等、感官の美感を生ずるもの多々ありと雖も、通常、その外に、更に大なる

快感あり、この快感は、演劇を見んと欲する願望の暢達より來るにはあらずして、實に知情・意各種の心意作用の調和的活動によるなり。

美的感情は自ら全身及感官の美感即ち身體的と、心意活動上の美情即ち心意的との二にわかると雖も、二者往々相混合せり。例へば、繪畫についていへば、感官の美とともに何等か心意活動を促すものあり、或は人の理想に觸れて限なき道德的・眞理的の心意活動を促し、或は人の常識に投じて認識の容易・旺盛を來たし、或は人の意表に出でて而かも認識の容易を失はず、以て心意の活動をして輕快に事物の表面を走らしめ、或は描寫の精緻そのものによりて、人をして人間の技術の到達する所を驚き思はしむる類是なり。

又演劇は心意の活動を主とせる美術なれども、之に各種の視覚的・聴覚的裝飾を加へて、始てその勢力を大にするものなり。

身體的美感はずし、心意的美情の伴ふことを要せざれども、心意的美情を引起さんためには、多くの場合に於ては、感官の美の伴へるを必要とす。今その心意的美情を引きおこす條件について少しく述べん。

一、清潔 主題に對して何等の意味なき無用の雜物を除く事は、心的活動をして、單一にして旺盛ならしめ、より活動の快感即ち美情を起す。

二、整齊 清潔と畧同なる理由あり。

三、均衡 事物の常態は均衡を得たるものなり。故に均

衡を失ひたるものは心的活動支吾して美情を生ぜず。
四、變化又新奇 これらは心的活動を促進し、擴張するに
よりて美情を生ず。諸興行物は多く此情に訴ふるものなり。

五、統一 事物の全體に通じて一貫の意味明瞭なるとき
は、心意活動をして支吾なく流暢ならしむ。之に反し、
例へば、演劇の或幕に於て、前後に關係なき趣旨不明瞭
の所作をなし、若しくは或性格を有せる一人物が、その
性格にあるべからざる言語舉動をなす如きは、大に人
の美情を害ひ、不快の感情を引きおこす。

六、調和 例へば、活潑にして悲歌慷慨なる詩吟は、衣冠
に至り袖腕に至る劍舞とはよく調和すれども、綾羅翻

翮扇を手にしての舞に調和せず。蓋し調和とは事物の各部が心的活動の模様をして同一ならしむる謂にして、同一事物に屬する或部分は活潑激越なる心的活動を喚起し、他の部分は優々迫らざる心的活動を引起すが如きものは不調和となるなり。

七無限 天の如く、海の如き宏大なるもの、若しくは月色の如く、異香の如き幽微なるものは、人をして種々なる心的活動を引起さしめ、又その活動の模様をして日常に異ならしむるが故に一種の美情を生ず。

これらの條件によりて引起さるゝ美情の本質に就ての種別をいへば、美妙・高壯・豔麗・優美・快濶・活潑・雄渾・流暢・斬新・簡楚・富贍・高潔・精妙等あり。機智・滑稽の情もまた美情の一なり。

適當なる身的活動例へば遊戯又は適度なる勞作によりてもまた身體的美感を生ず。但しこの場合は他の感情を混合せること往々あり。例へば遊戯にて勝敗を争ひ、勞作によりて他の願望を成就する抔是なり。これらの心的活動に於て生ずる美情と、その自己の領分の擴張を喜ぶ情緒と合一したる快感はいはゆる興味^(意欲)の起る所以にして、之によりて更に他の知的活動の願望^(意志)を生ずるものなり。美情は活動の適不適により感ずる快不快の感なれば、實際的感情即ち意志の状態より起る情緒情欸、若しくは身體の快苦の感よりは勢力弱く、實際的感情の盛なる時は美情おこり難し。例へば演劇に就ては盛に美情を引起せども、之と同様なる實際事に就ては更に美情を生ぜず、若しくは赫

耀たる太陽によりて高壯の情を動かすこと少くして、却て星月によりて之を起すが如き以て知るべし。又、心的活動の適否によりておこる美情はその人の知識の程度、願望の種類、特にその有する理想、情操の高低、強弱及その時境遇の如何によりて變化し、同一事物必ずしも常に同一なる美情を引起すものに非ず。例へば、教育なきものは、藤房の帝を負へる圖を見て殆ど何等の美情を動かさず、又多く歴史畫を展覧して人事美に飽きたる場合に於ては、之と全く趣を異にせる山水の自然美に就て大に感情を動かすが如し。美情は又往々他の感情と混合せらる。例へば、無教育者が裸體畫に就て感ずる所は、多くは眞の美情にあらずして、他の感情なるが如し。

- 一、美情をおこす事物は善悪いづれに一致するか。
- 二、鳥羽繪が起さしむる美情を分析せよ。
- 三、美的感情の満足は必ずしも善にあらざることを述べよ。

第三節 感情一般の事

一、感情の性質 感情は、すべて身體若しくは心意、特に意志の状態に従ふものなれば、人々各個的にして又一時的のものなり。而して、その何故之を快とし若しくは不快とするかは、知性諸作用の如く分析することかたく甚だ自主的にして終極的のものなり。故に己の快とする所を以て必ずしも人に強ふべからず、又今の快とするものを以て常に必ず快なるものと定むべからず。されば、感情は、意志と同じく主觀中の主觀部にして、知性諸作用の如く外物に従ふ性

質すくなきものとす。

二、感情の融合 意志には、各種の意志並び存することあり、又相競合して一意志に決着することあるが故に、意志の状態によりて起る感情は、喜、悲、交々至り、快、苦並び存する事あり、又そのうちのいづれかに融合せらるゝ事あり。例へば、利益を損じたる不快感、は、名譽を維持したる快感に融合せられ、最初、兩感情心内に鬱結したれども、遂に快感に決着するが如き是なり。感應及美情が、實際的心活動の強盛によりて壓倒せらるゝも、また、この類の現象にして、兵士が重傷を受けて之が苦感を知らず、又人が、實際事に忙殺せらるゝに當りては、心に美醜の感なき如きもまた同じ事情なり。こはかの「最も強力なる心的活動は意識せられて、それより弱

きものは意識の闕外に存す」といふ一般的理法によりて然るものとす。

三、一般感情 感情が進みて意志となり、從てまた知性諸作用にも影響することは、前既に意志の章に於ても述べたる所なり。然るに、意識以下に存する諸感情が、合して一大無意識感情團をなし、無意識的に大に心意作用に影響することあり。之を一般感情といふ。例へば、初て或人に遇うて何となく嫌惡の感生じ、いづれの點を嫌惡するともなく不愉快なるが如き、若しくは或事件について、何となく疑懼の情ありて心の進まざるが如きは、皆一般感情の所爲なり。

四、感情の表出 感情は意志となりて外部にあらはるゝ外、直接に不隨意的に外部にあらはる。例へば何等かの快感

に伴ふ笑、何等かの苦感に伴ふ顰蹙、兩者の混合による苦笑、驚愕に伴ふ張目、若しくは開口、恐懼若しくは恐怖に伴ふ戰慄、羞耻に伴ふ紅潮、極感をあらはす嗚咽、流涕及長大息、又は音聲、舉動に異調を呈する抔是なり。笑にも種々あり、微笑は靜なる喜又は美情の快感を示し、冷笑は自己の優勝を喜ぶ表出にして、哄笑は事の容易を喜ぶものなり。又滑稽によりて起る笑は、常軌にある心的活動を一時に解放する愉快を表出するものにして、他人の倒れたるを見て笑ふ類も亦之に屬す。故に、もし、その倒れたるものが聊かにてもいたむべき創傷などを受けたらん時は、開放的笑は直に拘束せられて表出せらるゝことなし。又くすぐりによりての笑は、全く器械的にして、恰も疾走したる後心臓のはげしく

鼓動し、汗を出だし、顔紅を呈すると同じ。これら感情の表出はいづれも不隨意的にして、之を制止せんには、他の心的活動を喚起してその感情を意識の外に逸し去らしむるを要す。

五、感情の養成 感情はやゝ模倣的性質のものにして、又習慣的のものなり。故に溫和なる家庭に生長せるものは、たとひ大なる意志の挫折に遇ふとも、怒り怨むこと少く、不平多き家庭に生長せるものは、些少の事に於ても激怒する傾あり。特に情款は全く雙對關係のものなれば、完全なる感情を有する父母にあらずば、完全なる兒童の感情を養成すること甚だ難し。「鐵は鐵を鍛ふ」といふが如く、情は情を養成するものなり。されども、情は身心の状態に従ふものな

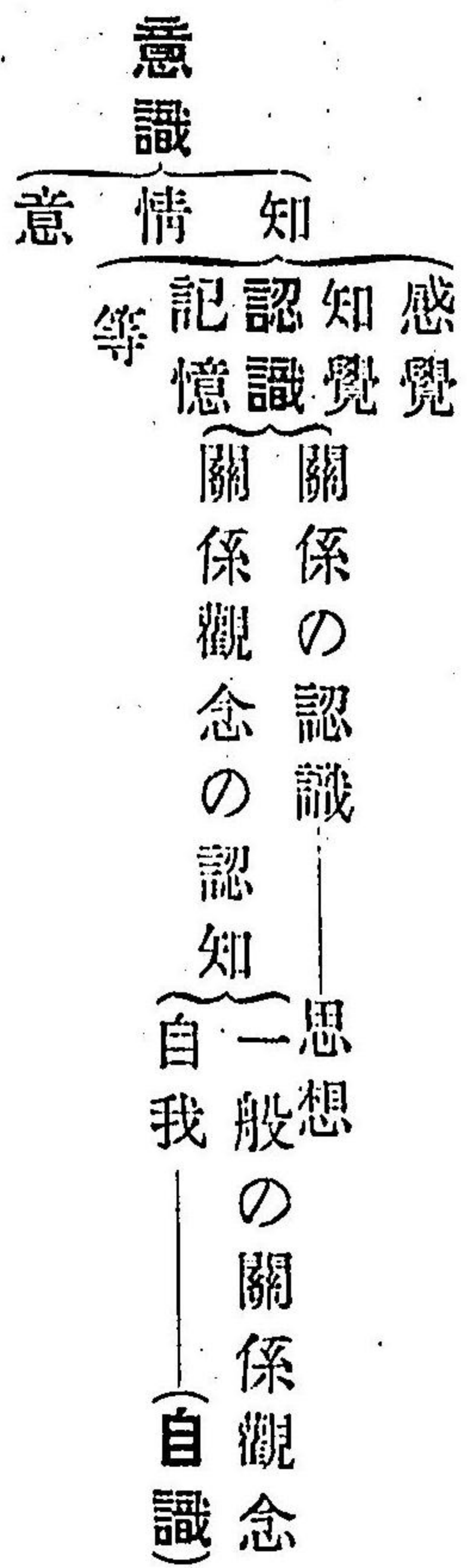
れば、先づ身心の状態を變更して、以て、その調整を謀ることをも得べし。例へば、運動を以て健康の度をすゝむるときは、意地わるき兒童即ち何事にも反情を起しやすきものも、自然意地なほり、過嚴なる躰方によりて、すべて他人を敵視する兒童も、深き愛情によりて寛和せらるゝが如き、若しくは知識をすゝめて妄に恐怖することを去り、意志を調整して怒を少くせしむる杯の如きこれなり。

一、修身説話にて兒童の感情を引れこしつゝある間に知性作用に訴ふる發問をなすことの利害如何。

二、無智野蠻のものに忿怒多く、文明君子の人に忿怒少き理由如何。

第四篇 餘論

一、我 身心の活動を認識するによりてその主體「我」なる觀念の生ずることは、既に前篇第一章中に之をいへり。かく我を認識するを自覺又は自識と稱す。今左に意識・認識及び自識の區別を示さん。



かくの如く、意識・認識・自識の區別は明瞭なれども、その自識によりて生ずる自我は、もと身心活動の主體として認識せ

らるゝが故に、一旦自我の觀念生じたる後は、すべての心的現象を皆その發動と做し、「我思考す」「我喜ぶ」「我行かんと欲す」採認識す。即ち自我の觀念は意識の全範圍に擴がり、意識も亦自我のうち、に吸収せられて、その發動と見做さる。かく、意識には自我の觀念常に之に伴へるが故に、意識ある場合には必ず自識(自我の認識)あり、自識なければ意識もある能はずとなして、二語を同義に解するものあり。されども、自識は自我なるものを認知する作用の稱にして、自我の觀念そのものを指すにあらざれば、意識に於ける自我の觀念の現出を自識といふは安當ならず。自我は、すべての活動の主體なれば、過去現在にわたりて唯一なれども、又その個々の活動につけて、見る我「感ずる我」欲

する我」と具體的に考ふことを得べし。是を個々の我といふ。日常いふ所の自我は多くは是にして、余は讀書せんと欲すといふは現在の我の意志「嗚呼嬉し」といふは現在の私の感情なり。かくて各種の意志共存するときは、之と共に數多の自我存在し、相競合す。「己に克つ」といふは、その一の我が、他の我を壓伏したる状態の謂にして、勝つものも勝たるものも、共に個々の我たるに外ならざるなり。知情意三種の作用は、有機的關係を以て互に相影響し、いづれを主、いづれを従と定めがたしと雖も、心意の初發なる衝動はむしろ意志に屬すべく、且つ意志は命令的態度を以て直接に知情の作用を制止、或は催進すれども、知情の意志に影響するは、唯間接にその素地材料を供するに過ぎず。故

に、意志を以て活動の根本中心と做し、その状態に伴ふ所の感情と合せて之を主観中の主観部と見る。カントが意志を以て絶対的・自主的・命令的の者なりといふも之が爲なり。されども、活動の中心といふは活動の主體の謂にあらざれば、主観中の主観部といふは、諸作用中の中心作用といふ意にして、自我と意志とは全く別物なり。混ぜべからず。

二、品性 個々の我は、元來の氣質、その時の氣分、知情意相互の關係等によりて或特色を呈し、例へば「感情強き我」「知力鈍き我」「意志不決定の我等」となりて顯はる。これら個々の我の總計より成る眞の我も、また、人によりて特色を呈し、或は義に敏く、或は利にさとりる杯の別を生ず。之を品性・人格又は人物といふ。

品性を形成する要素は個々の我なれば、完全なる品性を得ん爲には、先づ個々の我を完全にせざるべからず。而して、個々の我を完全にせん爲には、元來の氣質、その時の氣分によりて害せられず、又知情意の關係を良好ならしむるを要す。是に於て、教育・修養の必要あり。而して、一の善なる我は、我心内に於て他の善なる我を結果し、因果となり、果、因となり、多少の影響は終身盡くる期なし。これ哲人の小善をすゝめ、小惡を戒しむる所以にして、個々の我の善なるもの勢力を占むれば善なる品性をなし、惡なるもの勢力を占むれば惡なる品性をなす。知性作用に於てもその理はかはることなきなり。

教育・修養を以て品性に影響を及ぼさんには、先づその知情

意各種の心意作用を均整に發達せしめざるべからず。是れ即ち普通教育として重大に實行せらるゝ所のものにして、普通教育は力て、被教育者の長所を保存して短所を補ひ、氣質の偏のために自他に害ある事無からしめ、個々の我を進歩せしめて漸く品性の完全を謀らんとするものなり。されども、被教育者をして永久に個々の我を進歩せしめ得んためには、その心内に自ら導く光明を扶植せざるべからず。是れ即ち眞善美に對する情操にして、自己修養の元氣たるものなり。

三、情操 品性の完全のためには、その知性は事物の眞に合し、その感情及意志は善と美とに合せざるべからず。而して我を眞善美に合一せんためには、先づ知性に於て眞善美

の何たるを知り、その完全なる状態を想像せざるべからず。即ち第三篇第一章中に述べたる理想なり。この理想に對して深き快感を有し、之に反するものに對して強き不快感を持し、進んで之を實現せんことを願望するは即ち情操にして、全く知情意の合一せるものなり。この情操強盛にして、常に心意に存在するときには、個々の感情意志を指導して善美に向はしめ、知性作用を催進して漸く道德的品性を備へたる有爲の人物たらしむ。又、吾人が事物に遭遇して羞耻、懺悔等の感情を生ずるも、この情操の存在するが爲にして、この點よりいへば、情操は發達せる良心に外ならざるなり。意志の倫理的商量も、また全く、道德的情操あるによりて行はる。

情操は興味の積成せるものなり。人には、その最初より、活動を欲する無意識的意志あるが故に、知的活動適當に催進せらるゝときは、美的并に意志遂行的二様の快感生じ、その活動を繼續せんとす。是れいはゆる興味なり。之によりて人は眞善美の何物たるを知ると共に、之を好み、之を實現せんと欲するに至るものにして、即ち情操なり。或は永久の興味と稱す。人若し、屢々、情操を以て他の自我を制抑して行動し、後、常に、その結果の圓滿善良なるを認むるときは、情操に執着すること益々深きに至り、遂にはその身、名、財産を以てすとも、尙ほ此を彼に易へざるに至る。蓋し情操は目前の利害を超越せる感情意志なればなり。こは、かの、單なる感情の激發によりて他の精神作用を遏止し、ために身

名財産を惜まざるに至るものと全くその選を異にす。混ずべからず。

四、宗教心 とは、或經驗的事物若しくは想像的事物に就き、之に人間を左右する勢力あり、意志あり、又人間と自在に心的交通をなす力ありと想像認定し、之に對して感謝・恐怖若しくは嘆美・崇拜等の情をおこし、これらの感情より、或は好意的に、或は賠償的に、その事物の平和ならん事を希望し、又或は自己の願望を達せんために、禮拜し、祈願し、報賽するものなり。即ち、拜星教は、日月その他の星辰を以て、高處に居て地上の萬物を主宰し、人間のなす所を裁斷して禍福を與へ、その作用冥々にしてその勢力逃るべからずとなす。拜物教(牛又蛇)拜火教杯も、またほゞ同様なる心的作用なり。

又現世の英雄若しくは君長に就て、之とほゞ同様なる心状をなす事ありて、その人死するときは純粹なる祖先教となることあり。これらは皆いはゆる現世教にして、人的超人間物が、人間の現世に對するものなり。

通俗佛教及耶蘇教は、想像的事物を以て人的超人間物となし、人間は、たゞ現世のみならず、死後生前ともにこの人的超人間物の意志勢力のもとにありとなす。その他の點は拜星教、拜火教などとおほく異なりたる所なし。眞の佛教は宇宙の説明にして、勢力の不生不滅、物質の不増不減、宇宙の無始無終等を説く哲學なれば、これには人的超人間物なく、又禮拜祈禱なし。

眞佛教の一部にては、或心的状態を觀世音菩薩、不動菩薩な

どと名づけ、心、此状態にあるときは、盜賊悉退散、刀刃段々壞火も燎く能はず、水も溺らす能はずなどと形容す。例へば慈悲の一心無量なるときは、盜賊もわれに於て盜賊ならず。又實際悔遷して盜賊無きに至るべく、勇猛心振ふときは水も避くる所にあらずといふが如き意味にして、皆心觀上の事なり。然るを通俗佛教の或宗派に於ては、これらの心觀を人的超人間物となし、偶像を設けて禮拜祈念をなし、よりて以て盜難を避け、水、火を遁れんとす。偶像教と呼ばれる所以なり。

されば宗教心とは、人的超人間物の想像、之に對する感情、及之によりて自己の願望を達せんとする意志の結合物にして、その想像は或は迷覺、幻覺、夢、空想より起ることあり、然る

ときは、その宗教は全く迷信たることを免れず。又、宇宙若しくは人間の事象に就き、懷疑的考索をかきねて以て畫き出だせるものあり、然るときは強ち迷信といふを得ずと雖も、その人的超人間物を認め、特に之と人間心意との自由交通を認めて祈禱をなす杯の點に於て、尙ほ科學の承認を得る能はざるものとす。

されども、祈禱・禁厭の類は全くその効なしといふに非ず。禁厭のうちには、全く科學的條件にかなへるものにして、唯俗人は未だその理を知らざるものあり。否らざるものも雖も、祈禱・禁厭に人間の思議以外の効力ありと信ずるものには、之によりて心意の不安を去り、感情を抑へて意志・知性を振作し、或は血液の循行を良くし、もしくは事業に對する

興味注意を深くし、實際に有益なる効果往々ありとす。すべて宗教心は、超人間物の人間を照覽することを想像するが故に、人間をして平素の行動を顧慮せしめ、危難に際して、之に倚頼して心を安んじ、或感情の爲に顛倒せられざる効あり。但し、此は必ず宗教心によらざれば得べからざるものに非ず。事物の理を辨へて、之を嘆美し、崇仰する情をおこし、自我を之に投入してたがふ事なく、之に倚りてよく心を安んずる程度に至れるものは、即ち強勢なる情操にして、いはゆる知行合一、知情意一致のものなり。之を學問の側に於ける宗教的信念といふ。(佛教にては之を解信となづく)

五、自己保存 衝動及衝動的意志は各自の生活の中心にして、各自の心身は之によりて保存せらるゝなり。されば、此

は、心的現象として意識に上ることは却て稀なれども、深く心意の根柢に蟠りて、抜くべからざる本來の慾と認むべきものなり。この現象は他の動物に就ても畧ほ同様に存在するものにして、之を動物の自護律と稱す。すべての有情生物の心的并に身的の諸活動は、みなこの基礎の上に發展し、この中心の窠に出入するものなれば、心理・倫理その他の人事學を講究するものは、深くこの事を知了せざるべからず。「色食は性なり」などいふもこの意に外ならず。自己保存の中心につながりて、自己保存の基礎の上に發展したるすべての活動は、一括して之を自己擴張といふことを得べし。即ち各種の願望・意志の如きも、之に伴ふ情緒・情歎の如きも、將又感情・意志の發生の材料となり、又その方便

となる諸種の知性作用の如きも、皆之を自己擴張の現象として見ることを得べし。例へば、名譽權力の願望の如き、又は反情を以てその事物の減衰を喜び、同情を以て増進を願ふ如き、若しくは一を聞いて更に二を知らんとする如き是なり。されば完全なる自己擴張は完全なる發達及生活と一致するものにして、或は之を人間の向上性と名づけ、倫理の第一原理となすものあり。又自己を擴張して宇宙の大我と合一し、宇宙の大我とともに、永遠なる生命に入るべしと唱ふる大我説あり。これらは、そのいふ所異なりと雖も、その實は皆一に歸し、かの良知といひ、情操を高め情操と終始すといふものと、敢て異なるものにはあらざるなり。

六 催眠術 ある催眠術の研究者は曰く、「人には通常意識の

外に第二意識あり。従て第二の自我あり。この自我意識は、通常意識・第一自我の屏息せる或状態に於て現出し、通常意識第一自我にかはりて活動す。而して、第二自我は第一自我の全部を所有すれども、第一自我は絶えて第二自我を知らず、この點に於て、第二自我は夢と異なりてむしろ囁語・狐憑病の類に近しといへども、その現出中に於て活動せる所は、無意識のうち第一自我を左右する力あり、又單に精神上のみならず、身體上にもその勢力を及ぼすものゝ如しと。

他の研究者は、更に之に一步をすゝめて曰く、「第二自我は或状態に於てのみ現出すれども、その活動は坐臥ともにかつて休止することなく、又五官のために制限せらるゝことな

くして廣く空間の上にわたれり。故に身は今この地にありても、よくアメリカなる友人の起居動作を詳にし、之を語りて誤ることなし」と。

これらの研究は今や漸く盛ならんとし、現に之を以て醫療的作用を施すものあるに至れり。されども、未だ十分なる原理の説明を得ず、且つそのいはゆる第一自我意識との關係明瞭ならざれば、第一自我意識の取扱を事とする教育その他の人事學の上には未だ多く關係せざるべきなり。

明治三十七年三月廿一日印刷
明治三十七年三月廿六日發行

(新篇心理學與附)

定價金六拾錢

著者 川島庄一郎

著者 石井國次

著者 大戸榮吉

發行兼
東京市京橋區弓町十二番地
松邑孫吉

印刷所
東京市麹町區內幸町二丁目五番地
惠愛堂

不許
複製

發兌元

東京市京橋區弓町三
電話新橋三一七三

松邑三松堂

新刊教育書類

前東京高等師範學校教授 小山左文三著
實用教育學提綱 全一冊

東京師範教授 石川島庄一 耶次合著
新編心理學 全一冊

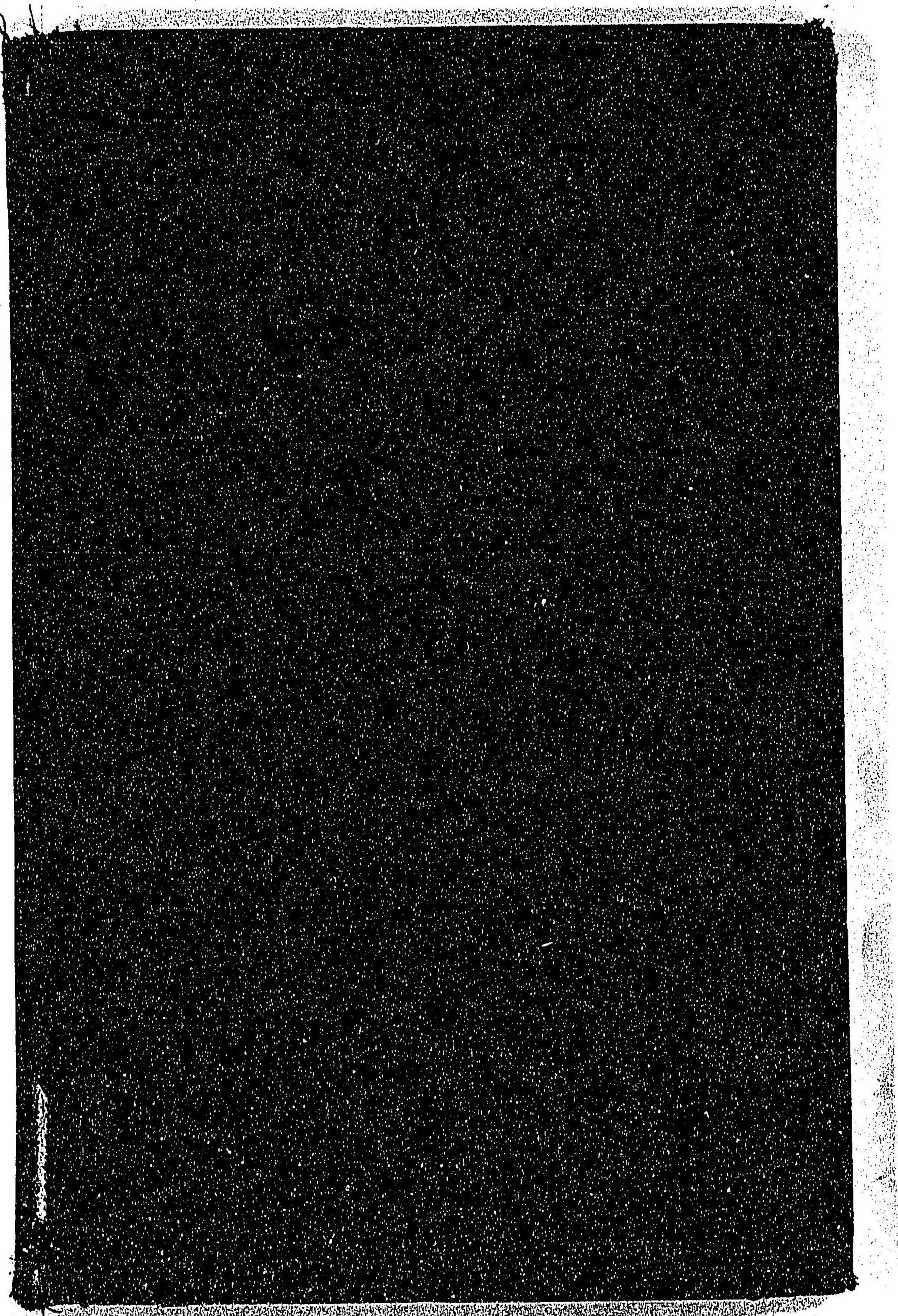
東京師範教授 石川島庄一 耶次合著
小學管理法 全一冊

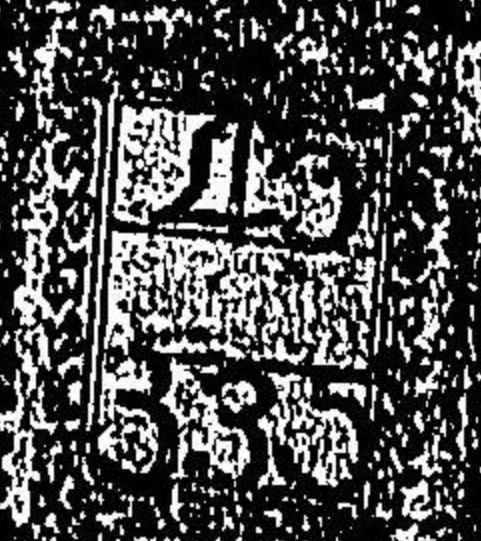
東京師範教授 石川島庄一 耶次合著
新編教育學 全一冊

東京師範教授 長谷川乙彦著
新編女子用教育學 全一冊

發兌元 松邑三松堂

45
335





012640-000-1

45-335

心理学(新編)

川島 庄一郎/著

M37

AAI-0200



